

明治四十五年四月九日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第六十三號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第六十三號目次

論 說

- 最近文學に描かれたる青年……………岩城 教授
- 自己を愛する心……………鳴 澤 生
- 一夜の感想……………岡田 走月

文 苑

- 戲舊里の別れ……………日色 瑪尼生
- 落日と驛路……………橙 黃 子
- 櫻貝……………井田 虎男
- 一種の自覺……………佐 藤 生
- Sur Jos Talus……………日色 瑪尼生
- 晝と夜……………とらを
- 四高俳句會句錄……………

雜 錄

漫 言

- 史的名言……………浦 井 生
- 劍道部南下に就て……………金子 要人
- 判斷と省察……………佐 藤 生

雜 報

- 叙任辭令……………
- 行軍記事……………
- 南下野球軍慰勞會……………
- 時習寮より……………
- 庭球部を送る……………
- 先輩通信……………

部 報

- 講演部……………
- 音樂部……………
- 劍道部……………
- 柔道部……………

北辰會雜誌第六十三號

論 說

最近文學に描かれたる青年(講話要旨)

岩城準太郎

最近文學と言つても範圍が廣く種類も多い。特に近時文壇變化の急激なことは一通りでない。二三年前新しい文學として一世にもてはやされたものも昨今はもはや顧みられぬ。今日新しいと思つて居るものも其の中に舊いといふやうになる。こんな時世に際して漠然最近文學と言つただけでは不明瞭である。自分が今こゝに言ふのは特に目下青年の間に最も勢力があると認めらる或種の文學に限るのである。目下の文壇全体を被ふやうな大勢力のあるものは無論存しない。幾つもの／＼ある中で特に青年諸子に氣に入つて居る流派に限つて言ふのである。

先づ斯く限界をつけて見ると、目下の文壇では所謂耽美主義の文學とネオロマンチズムの文學が代表的の地位に在るやうに思はれる。耽美主義の文學といふのは感覺を重んじ刺激を喜ぶ一流である。茲では便宜上官能主義と名づけよう。ネオロマンチズムの文學といふのは情感を

重んじ空想に酔はんとする一流である。茲では情緒主義と名づけよう、此二流派は何れも目下の青年に好かれて居るが、特に官能主義の方が勢力がある。だから今は主として官能主義の文學に附いて論を立てることとする。情緒主義のを並叙することは容易であるが、多少論旨が複雑になり且つ長くなるから、講話の簡潔を保つ爲に情緒主義の方は省略する。然し情緒主義の方を叙べても官能主義の方を叙すると同一の論法を用ひて同じ結論に到達するのであるから、態々叙べなくとも自然理解せられるであらう。

是れから本論に入る。

二

官能主義文學の作者は先づ永井荷風、續いて吉井勇、谷崎潤一郎、その他「三田文學」「スバル」「白樺」等に於いて多數に見受ける。是等の文學に描かれたる青年は扱てどんなものであらう。第一に目に立つのは神経の鋭敏なことである。官能の發達して居ることである。其の眼は色彩に對する感受性に於て卓越して居る。從來の青年の到底見分つことの出来ない微妙の變化をも感受する。色彩に對する官能は畫家も及ばぬ程の發達をなして居る。其の耳は音響に對する繊細なる趣味を有つて居る。粗放なる從來の青年の到底聞き分けることの出来ない微妙な音の情趣をも感じ分つ。音響に對する官能は音樂家も及ばぬ程の發達をなして居る。彼等は赤い色青い色を見るのみならず、高い色低い色薰る色甘い色滑かな色温い色などを見分ける。彼等は又大きい聲細い聲を聴くのみならず、灰色の聲赤い聲匂ふ聲苦い聲冷たい聲柔かな聲をも聴き分ける。其他鼻

舌皮膚、皆異常の發達を遂げて人を驚かす。鼻に感すべき事を舌に感じたり舌に感すべき事を皮膚に感じたりするは常のことで、時によれば、五官の區別を撤してしまふこともある。彼等に取つては從來劣等感覺として文藝から斥けられて居た鼻や舌の感覺も決して目や耳の感覺に劣らぬ。同等の價値を有つて居るものである。

第二に目立つのは刺激の追求である。官能の満足の追求である。既に官能の發達が異常であるから尋常一様の刺激では手こたへが無い。神経が並外れて鋭敏であるから世間並の刺激では満足が出来ない。且つ暫くでも神経を刺激し官能を刺衝するものが無くては堪へられぬ。鋭敏微妙な神経官能のやり場が無い。空疎の感寂寞の思がして仕方が無い。だから絶えず刺激をくゞと求め通す。目には常に面白い色彩を見たい、耳には常に玄妙な音響が聞きたい、鼻には常に心よい香を嗅ぎたい、舌には常に趣ある味を味ひたい、肌には常に肌ざわりの善い或者を觸りたい。而も其れが繼續的に來なければいけない。始終刺激を求めて居るから同じものでは直ぐ飽きる。所謂目が肥える耳が肥える、鼻も舌も肌も皆肥えて來る。もはや普通の刺激では追つ附かぬ。遂には奇怪な刺激不條理な快味を貪らうとするに至るのである。其の極途には又平凡な所へ逆戻りするものもある。例へば始めは正宗であつたが暫くしてきかなくなる、ウイスキーにする、ブランドーにする、アブサンにする、切りがない、あれでもないこれでもないのお仕舞は遂に繩暖簾の中で濁六といふ事になる。もつと猛烈な事柄もあるが例證は先づこれで善からう。

官能主義文學の青年はこんな風な生活を追求して居て其れでライフの充實など言つて居る。

彼等の所謂ライフの充實は異常なる刺激の繼續といふに外ならぬ。一体神経の刺激によつて結ばれた精神的の産物は畢竟感覺到過ぎぬ。官能の刺衝によつて作られたものは唯單純なる感覺到止まる。感覺は唯感覺到終つて居ては内容の貧弱なものである。精神的活動の方面から見れば原始的のものである。人格の發露といふ側から見れば甚だ空疎なものである。人間生活の意義から見れば唯表面を撫するに過ぎぬものである。是によつてライフの充實を得、全人格を振ひ動かす力を得んとするは聊かお門違ひではあるまいか。此の感覺が頭腦に集中せられ綜合せられ組織せられ、一の思想に形作られて始めて光彩を放つのであるまいか、始めて全精神を振ひ動かす活動になるのではあるまいか。新しい感覺の價値は新しい思想の材料となる所に存する。感覺其自らは淺薄である。思想に組み上げられて始めて新鮮な微妙な若い人々獨得な感覺も其の本領を發揮する。

明治文學の進歩は常に思想の進歩に伴つて居る。江戸文學から明治二十年代の文學となり、更に三十年代の文學となり四十年代の文學となる、其の間の進歩發展は常に思想の方面の力によつて居る。決して感覺だけに止まつて居ない。

是から史的觀察に移る。

三

江戸の文學は洒落本に始まる。こゝで江戸文學と言ふのは江戸時代の文學といふ意味でない、江戸の文學といふ意味で、西鶴近松芭蕉等を含めない方の意味である。生粹の江戸文學は實に京

傳の洒落本に始まるので、續いて黄表紙草双紙、種彦の合卷一九三馬の滑稽本春水の人情本等に終るのである。

扱て是等に描かれた青年はどんなものか。彼等は總括して言へば二つの理想を有つて生活して居た、粹と通とが是れである。彼等は粹人通士になるのを以て生活の充實と心得て居た。然らば粹とは何、通とは何であるか。此の二の語には傳來の歴史によつて玄妙な色彩を附けられて居るけれども、今の言葉で解釋すれば畢竟感覺の修養せられた状態といふに過ぎぬ。粹とは鍛練せられた感覺といふ事、通とは該博な感覺といふ事に過ぎないであらう。何れにしても唯感覺到止まるので、其以上一步も出て居ない。總て人間生活の核心に觸れて居るものではなく唯表面を撫でるだけのものである。江戸文學の青年は精練な然し、淺薄な趣味に満足して居た。

明治文學の進歩は此の粹と通との文學を脱却して思想の文學を迎へた所に存する。其れも逍遙氏の「書生氣質」や紅葉氏の「多情多恨」以前の作品やにあつてはまだ江戸の臭味を脱却し切つては居ない。新しいやうではあるがまだ粹と通とに未練が残つて居る。此の状態を見て新文學の爲に奮起したのは北村透谷である。舊型破壊の鐵槌を揮つて江戸文學の殘骸を喜んで居る當年の文學を打撃した。爾來明治文學は一步思想の方面に進んで遂に理想小説の叫となり觀念小説の呼び聲となり心理小説の旗擧となつた。紅葉すら此の風潮に影響せられて「金色夜叉」を書き始めたのである。間貫一は尙淺薄な一青年に過ぎないけれども從前の青年に比ぶれば多少の内的煩悶を藏して居る。唯々感覺を追うて居る江戸文學の青年ではない。

更に此の二方面を代表すべき適切な例證を取らう「魔風戀風」の夏本東吾と「青春」の關欽哉とを比較して見ると面白い。東吾は刹那の感覺によつてどうでも動く青年である。深い内省もなければ痛烈な煩悶もない。之に反して欽哉は思想にへたばりつゝ居る青年である。自己の行爲、自己の言語、何でも之をフィロソファイズしなければ承知しない。一高の藤村操が身投した頃の青年としては東吾の淺薄なこと呆れる程である。欽哉は人好きのする青年ではないけれども多少當年の青年の核心に觸れて居る所がある。明治文學の江戸文學よりも發達して居る所は欽哉の東吾より進んで居る所に在る。

高山樗牛は尙ほ貫一や欽哉にあき足らないで更に深い思想の文學を要求した。彼は當時の日本文學には到底自己を満足せしむるに足る深き思想の文學を見出すことの出来ないのを慨して、去つて之を外國文學に求めた。彼はホイットマンを呼びニイチエを叫びハウプトマンを呼びイブセンを叫んだ。何れも是れ思想の文學内觀の文學である。イブセンの何の戯曲を見ても只管感覺を追ふやうな青年を見ない。爾來今日に至るまでイブセンの思想の我が文學に恩恵を與へて居ること夥しいものである。所謂考へさせる文學といふのは此の種の文學に附けられた名である。

明治文學も長き努力の後辛うじて此所まで漕ぎ附けたのである。翻て思ふ最近の官能主義文學は此の進運を無視して江戸の昔に逆戻りするものではないか。官能主義文學の青年は江戸文學の青年の殘肴冷杯を嘗めるものではないか。果して然りとすれば明治文學の爲に悲むべき現象と言はねばならぬ。

是れから本題に戻る。

四

官能主義の文學に於ける青年は無暗に江戸を戀しがる。江戸を以て自己の感覺を満足すべき總ての機關の具備して居る所で、而も其の各機關から快樂を享くる十分の自由のある極樂郷と信じて居るらしい。惜しいかな江戸はそんな有り難い所では無い。素町人否平民連中が自由に享樂の出來る所では無い。歡樂の享受どころか生命の安全すらも保證せられて居ない所である。明治の聖代に生れて卷煙草をふかしながら大道を濶歩することの出來る目今の青年が假りにも懂がるべき所でない。今の文學に於ける青年が江戸を慕ふのは其の亡魂を戀ふのである。然し何故に其の亡魂を慕ふかと言へば前述する通り江戸文學の青年と官能文學の青年との間に一味相通する所があるからである。外の理窟からでない、趣味の類似からである。

もう結論にする。

官能文學の青年は感覺のフレッシュシユならんことを追求する。然しフレッシュシユな感覺の價値はフレッシュシユな思想の材料となる所に存するのであるから、これ等が頭腦に集められ組織せられて新しき思想となりて現はれて茲に始めて明治文學の青年として後代に誇るべきものを現出するのであらう。今後の文學は如何なる傾向を帯びるかは豫言は出來ないけれど、願はくは人間生活の核心を振ひ動かすべき思想の文學であつてほしい。

右は二月二十四日講演部例會で試みた講話の要旨である。委員の希望によつて之本誌に掲げる事にした。然し筆を執つて

見るさ大体の腹案はしてあつたものゝ何と話をしたか思ひ出せぬ事もある。又話をしたことにより少し布衞しなければならぬと思ふ所もある。さにかく該講話の骨子は右の通りであるから、これで講話者の精神の存する所を了解して頂きたい。(三月五日記)

自己を愛する心

鳴 澤 生

(一)

焦心自裂、何物かを求望する思ひ、遣瀨ない戀にあこがるゝ悲しみ、わが慾求の對象物を知らざる疑惑、かうした想ひに飛び立つ様な生活を送つて居るのが近代人の心裡である。追つかけてゆくと急作の爲めに行詰つて仕舞つた様な生活である。破壊の快感も、自己と何等交渉のないとする人生嘲笑の痛快味も、其儘鑑賞してゆくことが出来なくなつてしまつた。日を仰いで明日生くるを思ふては今更ながら自己を取捲く不安に襲はれざるを得なかつた。

強烈な壓迫力を持つた或怪物に追つかけらるゝ夢——あの夢の中で私は幾度か眼の前に冷酷な現實生活を見せつけられた。其れは曾て吾等の五官に映じた場面を舞臺として、何處よりか漂然と來た私は只飽くまで逃れやうとする、目が昏むまで無暗に走つてやがてホツと息をついで振返つて見ると怪物は何時か自分の背後に其恐ろしい毒手を延ばして居る。と思ふと自分は復た直

く追はれる人であつた。かうした反覆的な動作を際限もなく繰り返して苦悶した揚句怪物は遂に自分の襟首を捉へたと思ふと、ふと眼さめる。丁度之れである。數知れない不安や懷疑や絶望やらは様々な手段で吾等を捕へやうとする、吾等は今や何處にか其避難所を求めやうとくれまごうた様である、かうして一切の悲哀や煩悶や廢頽を叫んで行き所がなくなりハッと目かさめる、それが死といふ事實である。

生活の内容として反抗の誇り、虚無冷笑の態度、享樂の歡びが擧げらるゝならば、慾望の疲勞や幻滅の悲哀はやがて其一部分であらねばならぬ。かうした雰圍氣の中にある何處までも充實した味ひを見出さうとする努力の中には明らかに自らを偏愛する心の深さを探り出すとが出来る。何時の頃よりか吾等は思索して行かねばならぬ様になつて來て、さて色々な生活味に接觸した時、今更らの様に自己偏愛の運動が深く胸底に刻み込まれてゐるのに驚く。故にかうした分裂、焦心の中に蟠まる近代人の生活の立場から、如何にして自己を最もよく生かしむるかを企畫すると直ちに先づ自己を愛する心、執著の慾望は影の様に後から纏ひついて來る。

(二)

人間の生活が此点まで到達したならば、其の心や慾望の行き方に幾種も生じて來る。吾等は各自己に適應した方向を選んで、あくまで自己偏愛の慾望にそぐはうとする。追憶や憧憬が其一方面であるとしたら宗教の天地藝術の天地も亦た其領界を脱することは出来ない。人間の苦悶に疲れた顔、憧れるゝ求望に到達し得ない叫び、此等を離れて最も歡ぶべき最も謳歌すべき緊張し

た生活に入らんとする人は折々追憶や憧憬に逃れてゆく。其心の根底には思ひきつて自己に戀々たる念を見せつけてゐる。新らしい宗教や藝術の境地は只かうした隠れ家の中で最も權威ある最も切實なる——勿論其の経路に行きかけた人々にとつて——門戸であるんだ。私は理性の力なんか到底及び難き所に高く構へてゐる感情的信仰の人達にも、又は稍もすればぐらつかうとする其苦悶から既に脱して得た鋭敏な強烈な信仰の人達にも、矢張り自己執著偏愛から立昇る凱歌を聞くことが出来る。こんな風に色々な追憶や宗教やまたは新らしい藝術の領界に踏み込むで、適應した自己に生きんとする人は幸福であると思ふ。

(三)

私は新しい宗教について今少し述べて見たい。

自然人生を通じた矛盾撞著混亂紛叫の中に重大な意義を存して居るのが宗教である。宗教がいかほどまで人生問題に其根底を据えて居るかは別問題として、少なくとも新宗教の態度は漸く時代と接觸しつゝ行かうとする傾向を來して居ることは否むべからざる事實である、言ひ換へれば現實生活に沿ふてどこまでも意味を保つてゆかうとしてゐる。今宗教といふものゝ成立に立戻つて考へて見ると、それは死の恐怖より生ずる或種の求望を満足せしめんとしたのに起因するは勿論であつて現代に於ても其れは宗教の包含してゐる大主眼であるには違ひない。死に對する戰慄、生の執著は依然として嚴然たる綱領であらねはならぬ。だがかうした低徊趣味な迂遠な主張が果して眞面目に緊張した生活に生きんとする近代人の腦裡に渾然と同化してゆくことが出来るかど

うか。切實な生の享樂を慾する一念、蕩擻き惱める力の悲みは此處にも激しい憧憬に陥つた。現實的宗教と理想的宗教との悲しい衝突が起つたのである。

私は宗教が被征服者となつたとは言ひたくない。渾然として解けゆくに適した形となつたのである。かくして其主張は現實と親密になつた。實際眞に絶望的な困憊した心にはもつと焦眉な問題がある、先づ如何にして自己を生かしむべきかといふ當面の解釋を要求せねばならぬのである。こゝで宗教の領界と現實の自己との間に深嚴な交渉が始まつて來る。

元へ戻つて、私の所謂自己を偏愛する心とは、生に對する執著の一部と見做すことも出来る。罪惡と悲哀と困憊をくりぬけて飽くまで生にすがりつかうとする淺ましい執著はまた、凡ての誘惑と苦痛とを排して最も完全に自己愛著な生涯を送らうとする心に相似をなしてゐる。そこで此自己偏愛の上に感ずる痛みは、やがて切實に自己と交渉の深い新宗教の門戸に至つて、其癒して貰ふこととなるのである。

自己愛著の慾求より生ずる痛み、凡ての人生の悲哀や煩悶は是れより分派して生ずるものである、かうして自己を玩味鑑賞し、悲慘な此の痛みの全部をあげて宗教なり藝術なりの天地に投げ込むでゆきたい。

(四)

翻つてまた、吾等はこの自己を愛する心を何處までも尊重してゆきたい、理想や眞理の追及や窮極の快味は畢竟この成果に外ならないからである、前に言つたあの怪物に追はるゝ夢で、あの

夢を形成してゆくのは即ち此自己偏愛の心である、夢其者の是非は別として自分の生涯を築いてゆく上に於ける技巧的な力は、また此心持てあるからである。此心を奪ひ去つた人間のみぢめな様は見るに忍びない、そのまゝやがて自滅の日が来るのである。片上伸氏はいつか次の様なことを言つたことがあつた。

「——冷たい灰の崩れるやうにじり／＼と自己が萎縮し自滅してゆくやうな感じ……泣きたいと思ひながら熱い涙の出で來ぬうちに自己の心は力なく冷めてしまつてゐた。——もどかしい力であつた、呆然として自己の廢頽を見まもるより他に仕方のない日が續いた、かうして自分等の心に漸く自己滅亡の日が來たのである——」

幻滅の眞の悲哀といふやうなことを論じたものであつたと思ふ、私は此れを自己を愛する心を失つて藻掻き沈める人の亡びゆく様を言つたものと想ひたい。何時の日か我等も亦かうした廢頽の自己を見守るべき運命に逢着するのであらうか、私はなほ切に自己偏愛の心を尊重して、適應した充實生活を全ふしたい。(完)

一 夜 の 感 想

岡 田 走 月

悲しいと思ふ時辛いと思ふ時自分はこれを作に書いてみた一刹那幾分其の悲しみや辛さが軽くなつたやうな氣がする、これは何が爲であらうか、私は思ふ、個人感情の再現に伴ふ愉快、この小さな自我に印した感情が大きな廣い藝術圈内に浮み出た自由の快感に職由するのではなからうか、自分はやがて滅びてしまふべきものである若しこの刹那々々の感情を永遠に滅びざる藝術に托することができたなら自己の肉體が他日滅ぶとしても多く悔いないであらう——といふ永遠を慕ふ感じに他ならないのではなからうか。

目に見えぬ生死を司る自然力に對し、かの「時」てふ音なき破壊に對して戰つて尙ほ後世に残存するものは、眞に人情を傳へた藝術である、藝術は時間を超越する、人間といふ生物がこの地球上に絶えせぬ限り彼等は藝術の愛護者となるであらう、世間に悲哀の快感といふ諺がある、他人の遣る瀨なき悲哀に接して自分も全然其の悲しみの中に没頭しながら却つて一種の満足と愉快とを覺ゆる情緒である、博士大西祝氏は其全集の中に之を論じて之を對比作用に歸せられた、即ち自己現在の立場が其人の悲惨なる立場に比してより幸福であると悟つた満足によるとせられた、然しこの場合そんな功利的な考の存在を許すであらうか、至醇至誠なる感情の流れ、それに身も心も打こんで我のものは人に傳へるものは我にとりて共に泣き共に笑はんとする人性自然の欲求それに基くのではなからうか、たゞこの際の感情たる單に自我に執着せる如き淺小なるものでない自己を離れ煩惱を離れて人間の爲に悲しみ人生の爲に泣くが如きよほど絶對自由なるものである、自己を絶して藝術に生くる心、利己を越えて汎愛に及ぶ心——宗教心上よほど近いものであ

る、もし強いて之に名稱を附するなら對比作用といふより寧ろ類推作用といふべきであらう。

私は人生の真情を解する人を尊く思ふ、いくら貧しくあつても又無學であつても之を解する人は之を解せざる富有の人、博學の人よりも尊く思ふ、私はかゝる人には心事するのを耻と思はない、たとひ物質的には如何に充足されて居ることも尙ほ人生最奥の安心と不變の樂しみとを希ふであらう、私は貧しくても愛と涙のある男や女を敬しその人々の生活にはきつと美はしいものがあるらうと想像する、

自分は宗門の高足方が却つて學問に禍せられて純正な信仰に入ることができないのを悔ひ一文不知の在家衆を羨まれるのを見る様に藝術の眞境は作者其人より却つて反對の地位にある凡俗無智の人々に存せぬかと思ふ、つまり作家等は精神的欲求の不満をこれらの人の間に發見し之を作用に上せて自ら慰むこととなる、近松の戯曲か殆んど遊女を描き心中を捉へたのもこれによらうか、自分は心中は愛の爲に精神も肉體も高熱の炎に包まれて燃えつくす様な美しい事例の最たるものと思ふ、彼等は眞に人生悲しい心を抱いて大空に照る月影を見る、眞に愛する心を持つて互の眼に輝く涙を見合ふ其處に幾千年遡つて原始時代からの變らぬ戀と人情との美しさを發揮する、彼等は眞に人生の爲の藝術家でなくてはならぬ、事實に於ての詩人でなくてはならぬ、過ぎし月柴山瀉に投身したといふ若き男女の新聞記事は何かしら心靈の琴線に觸るゝものがあつた、美と詩歌と涙の貴き高調が其中に含まれてるやうな氣がした。

二

自己描寫といふ聲が文壇の一方にある、草手氏や三重吉氏は絶えず自己を語るることによつて生きてゐる人だと評した作家があつた、嘗て藤村氏が並木を出したとき八釜しくモデル問題が起つた、あの時は始めて人間の實生活を作に上すに至つた新紀元かもしれない、それから文壇は進んで自己を作に上すことになつたのであらう。

實際筆を取る上に最も近い密接なものは自己である、最もよく了解して居るものも自己である、作品といふものが人生の經驗現實なまよがらいふものを宛然に彷彿せしめるものなら自己を語るの是最も本旨に副ふ次第である、又嚴密に如何なる作家でも他人の胸中に這入られない以上如何なる人を描いたとて自己の心理から推及したとも云へないであらう、特に吾人が前項に論じた様に吾々の「作らんとする欲求」から深く察して見れば藝術といふのも賤劣微小な自己をして永遠の生命に鎖がれしめんとする努力に外ならないとさへ言へる位だから自己告白自己描寫といふことは永久に創作の根柢となることであらう、然し自己を叙ふるに當つては自己に對する他人、人生に於ける自己の地位を併せ考へて主觀の叙述を及ぶだけ客觀的になさんと心がくべきである、自己を完全に作中の人物に化すべきである自己に即き過ぎた態度は要するに未だし、自己より進んで人生といふ廣い表面に突き出で、藝術といふ自由の境を覗かんとするに至つて完たしであらう、然し之に關聯して私は一の疑問を有する。

蘆花氏が「寄生木」を書いた理由の中に「寄生木」は乃木大將及び夏子、夏子の家族に讀んで貰へはそれで好いと思つて書いたのだ現に讀んで呉れたやうだから私の目的は達したといつたのを花

袋氏が評して「私の考では藝術が人生の爲に藝術になるのをさへ嫌ふ、況んや藝術に個人を對象しやうなどは夢にも思はない、蘆花氏が本當にさういふ意味で書いたのなら「寄生木」一篇は唾棄すべきものであらうと思ふ」と云つたことである。

これは勿論花袋氏のアートフォーアート主義から出で居るのだらうが特に個人を永久に傳へんとする創作は一概に誤つたことであらうか、徹底藝術主義は豫め目的を立することを嫌ふ、無報酬、虚無者のな藝術である、然しそれは作をする態度上の心掛で、一方吾々は内心の要求を顧りみぬ譯にゆかぬ、道義や品格を目的とせる藝術は排すべきだが、衷心より發する願望をすら抑壓閉却すべきであらうか、私は事實上から見ても是等が今日までの文學を生み傑作を生んだ大原動力だと思ふ、所謂莊美妙美の極点とも云うべき印度文學などは有力なる一例證とならう、たとひ本來それが余り意義の無いことにしろ人が此世へ來て人一代の運命を形成るといふことは記述に値することである、昔から多くの人——英雄も居れば愚人も居たが——が生れて來て又辭し去つたのだが、夫等の人が何處迄精細に、如實に描かれてるだらうか、私はかう思つて見ると、昔から數多く描かれた人間と人生もまだ粗雑極まつたものだつたことを深感する、たとひ一個人なりとも、一冊の傳記であつても、眞に人情を傳へ、人間を彷彿せしめたものは、不朽の價値があるに違ひない。

人間は藝術の愛護者である、直情の耽美家である、眞に天分を盡した藝術家は世界が破滅せぬ限り、子孫の胸に生きるであらう。

(四五、二、一五稿)

文 苑

劇 曲 舊 里 の 別 れ (一幕一場)

日 色 瑪 尼 生

序 詩

荒廢の趾の愁ひは
打ち顛ふ月の光に
銀灰の夢被せられし
穗すくきの着き悲み

追憶の甘き薫りは
漂泊ひて曉空に咲く
鑄銀の星に燃ゆたる
水色の櫻草とも

滅亡の床しき色は
涙ぐむ草場の上に

投げられし琥珀の盃の
縁に散る黄金の涙よ

荒廢の蒼き愁ひと
追憶の甘き薫りさ

滅亡の涙の色と
幻は纏れ彷徨ふ

吾は生かざる愁に
吾は生かざる薫に
吾は生かざる涙に
吾は生かざる幻に

登場人物

- 若き武士
- 水色の女房
- 老いたる武士
- 急げる武士
- 怪しき僧
- 禿童
- 荒廢の翁
- 見廻りの武士

舞臺は荒廢せる福原舊里の一部を示す。

中央よりやゝ上手に古びたる御所の門あり。門は毀れたる階段によりて内に導れ、扉は半ば閉ちて隙間よりは秋草の亂れたる様見ゆ。門より左右には壞敗せる長き土塀連り、灰色の壁には黄葉せる葛などの露にぬれたるが月光に白く輝けり。土塀の上には樹葉まばらなる數本の樹淋しげに空に聳れ、その間より朽ちたる御殿の靈なご散見す。門外に一本の繁れる大杉一種の神祕を暗示して立てり。

秋の夜は已に更けて月は稀々西に傾き、門の屋根、樹々の梢、門前の路に散らばへる石等すべて冴々たる月光を反射せり。

舞臺は深更の寂寞、遠く海波の汀を打つ音のみ太古の沈黙を破りて銀蛇の餓に泣けるが如く悲しげに聞ゆ。

○若き武士

緋威の鎧、太やかなる太刀、すべて剛氣なる作り、左手に滋藤の弓を持ちたり。
下手より歩み來り……

夜は更けたらしい。(間)蒼黒い海の様な夜の膚が俺の頬に冷や冷やと觸れる。思はず過した宵の酒が、漸く覺めかけて來たのだな。酔覺めの顔に月の光がなつかしくさしこんでくれる。(間)あたりを見まはし何だか今日は深いく土の下に埋めて置いた追想の壺が獨りでに飛びだして俺の胸にころげこんだ様な氣がしてならない。忘れてゐた歡樂の夢が冷たい夜氣と共に俺を取りまいてくる様な氣がしてならない。四圍の景色が俺の心を誘ふのか、俺の心が四圍の氣分に誘はれるのか、あゝ過ぎ去つた年の樂しかりしことよ。(遠く光れる雲を眺めやり)あはれ濱の御所じやな。三年の昔、吾

等一門が月見の宴に浮世の憂さを知らなかつた濱の御殿じや(間)今、俺の胸にはあの時の様が、沙底にさしてくる満潮の様にひし／＼と心地に浮びだされて来た。(追想の甘さに酔へるが如く)あ時にはあの廣い御殿が銀燭の光りに満ちてゐたな。迴廊から眺められた美しい海の面には紅い漁火が戀の魂の様に光つてゐたな。そして列座の前に並んだ青玉の盃の一つ一つにまごらかな月の影が映つてゐたな。一門の人々が打ち鳴らす笛や鼓や琵琶の調が渚うつ波の音に連れ碎けてその間を廻つてゐたな。あゝ、あの綠色に光つてゐた灘の美酒の味は今だに忘れられない。俺はその時何をしたのだらう。そうだ、俺はあの廻廊に近い所に座つて笛を吹いたのだ、(間)あの時には俺の腕はこんなに荒れては居なかつた。俺の唇はこんなに乾いてはゐなかつた。そしてあの漢竹の笛のひびきがごん／＼に若い人々の心をそつたであらう。(深き追憶の情に捕はられたるが如く門前の石段に進みよりて門内をうかがふ)おゝ、門の内には秋草が足の踏み入れる所も無い迄に亂れてゐる。物音一つしない寂しさ、草叢の露を命の蟲さへも秋の夜の冷たさに歌ふ力さへ切れたのであらう。(樹葉はらく／＼こぼれて石段の上に散る)葉が散る。枯葉がこぼれる。運命の薄ら影に青ざめた足をはこんでゆく灰白の巫女の様、秋の落葉は迷ひゆく。あゝ、衰滅してゆく秋の色、俺は今夜の様に泌々と哀愁の想ひにうたれたことはない。(間)わが尊き一門も遂にはかゝる運命に誘はれて、寂しい最後に赴かなければならないのではあるまいか、(決然たる様にて)いや、それはさせまい。衰へたりとは云へわが一門、能登殿も御在す、知盛殿も御在す、俺等の命のあるかぎり、黒い腫の血はしるかぎり、天下に白い旗は擧げさすまい。この弓にかけて、この刃にかけて、このたくましい腕にかけて、俺は誓つて

見せる(間)に、くき源氏の猪武者いのししむしども、いつかは思ひ知らせてやるわい。この次ぎの戦ひは何處の里で行はれることやら。宇治に響いたこの弓弦、北の篠原に冴えたこの太刀先、あゝ腕が鳴るわい。(空を仰ぎ)古い事が思ひだされて思はず時をいかう過した。さらば舊里の月に憧憬れて冷たい川の水をくまうか。

云ひすてゝ上手に歩みさる。まもなく下手より水色の女房あらはる。

○水色の女房

水色の被衣、笠をは右手に提ぐ。

人目を忍んでやつこの思ひで漸く此所まで迷ふて来た。(前後をふりかへる)誰方も來られはすまいか(門前まで歩みより内をのぞきそれより杉の樹蔭により沿ふ。笠をは地上に置き)これ待ちこがれてゐた戀しい人の御消息を望にもまして鮮なこの月影で讀ませていたか。かう。(傍の石に腰をかけ懷中より手紙を取出し、おし載きて靜かによむ。しばらくして忽ち怒りの面持、持ちたる手紙をひき裂きて地上に投げ捨つ。)えい、妾はたばかられたか。戀しい人からの御便たまとわれを偽り、いやらしいこの文面、くやしいことじやわ。(間)それにしても戀しい方には人々の噂にもれ給はず、やつぱり戦場の露と御消え遊ばしたのか。不運なるは妾の身の上、父を失ひ、兄にさきだされ、(唇をかみ)今また命とたのむかの君を失ふとは、(間)ながらぬこの身の行末、たふれかゝりし一門の運命(決心の表情にて)これ夜のあけない内に……

上手に走り去る。老いたる武士下手よりあらはる。

○老いたる武士

黒革威の鎧、長やかなる太刀、小薙刀を小脇に抱へたり。

珍らしい好い夜じやな、空を眺め四圍を見まはす。二十日と云ふに月の光は隈もなく冴えてゐる。屋根の上には早や霜がおりたのか一面に水銀をぬりつけた様に燦めいてゐるわい。路がどこまでも白う光つてゐる。葉を振り落された樹々の枝が露にぬれて神経の様に天鵝絨の空に青白く款戯てゐる。間靜かな夜じやな。すべての響と云ふ響を月の光が吸ひとつた様に寂寞じや。(間)お、波の音が此所まで聞えてくる。床しい響じやな。まるで深い湖の底で酒宴につかれた若い女が歌ふ音の様だ。あれに聞きとられてゐると俺は今まで自分を苦めた嫌な思ひが一つ一つ消えて行つて、楽しい思ひ出が吐きだす甘い花の香をかいである様な気がする。(間)この間からの激しい戦ひで俺は必々と戀しい夢に胸の血を休めることが出来なかつた。これ今日は心ゆくばかり靜かな月に照されて、あの波の音にまつわる思ひ出の幻にしばし生きて見よう(門の前まで歩みより杉の根本の石に腰をおろす、長刀を杉の幹に寄せかく)誰か今しがたまで休んでゐた者のあつたと見えて石が暖かみを持つてゐる。肌の匂ひが女の様だ、(傍の紙片を拾ひとり)戀の文か、もうこんなものを見たこと、ひからびた俺の血管がどうして再びとき打つことがあらう。(紙片をかたへに捨つ)それにつけても思ひだすのは若い頃のことであるわい。忘れ難い戀の血潮、消えがたい刃の光、悔いと憂と苦味とに満ちた俺の若い頃の思ひ出の中に、たゞ光つてゐるのは戀の涙に刃の幻じや。(かたへの長刀をひき寄せ)お、白刃に月の光の反射し、痛い様に俺の眼を射るわ。あ、幾人の血がこの刃に塗られたことであらう。忘れもしない宇治川岸、あそこで俺に刃むかつてきた若武者はほんとに美しかつたな。首を

あげたその後までも微笑が顔に残つてゐたな。草叢に流れたあの若き子の血の色は眞珠色に光つてゐた。北國の敗軍に五月雨の一夜をあかした夕べ、藁屋の娘の如何に自分の心を引いたであらう。礪並の麓で逢つた女の横顔の麗かさ、木幡の森かけにちらりと見えた若い女の後姿のやさしさ、俺は今だに覺へてゐる。(間)京で討ち取つた老武者は白髪を染めてゐたな。老と云ふものを彼はそんなに恐れてゐたのだ。しかし手剛い奴であつた。(間)あの時、老武者は何とか云つたな。(間)うん覺えてゐる。覺へてゐる。「他人の命をとるものは暗い地獄に投られるぞ」とかう云つて俺を蹴んだのだ。そして「幻が消える、灰色の鳥が、血の魂が……」とかすれた聲で云つて骸骨の様な齒をガチガチ震はせて眼を閉ぢたのだ。その聲は鋭い刃の様に俺の胸をえぐつた。それから俺は一度だつて人を殺したことはない。戦があれば逃げどうした。(長き沈黙)己はもう戦ひと云ふものにあいたのだ。長い間の殺生に、この瘦せた腕は骨の髓まで疲れてしまつた。いつまで俺は悲しい戦ひと云ふものに身をまかせて居らなければならぬのであらう。(間)わすれてゐた疲勞の力が今波の様におそつてきた。これ一眠りして美しい夜を明かさう。

樹幹にもたれてねむる。

○急げる武士

無言にて上手より下手に入る。手には小さき箱を持てり。つゝきて怪しき僧下手よりあらはる。つゝ行き逢ひて互につめたき眺めをかはす。

○怪しき僧

墨染の衣、右手に笠。舞臺の中はごに進みて空を仰ぎ

黒い星が三角形をつくつてゐる。青い星が五角形をつくつてゐる。月は落葉の様に巻きかへつてゐる。世は變る。多くの人は波に沈むに違ひない。空にあたりを見まはし朽ちた藁よ、何故に泣く。人の世の榮華の夢は風に散る金色の病葉よりも果敢ないものじやのに。月の光に執念の華の様に顫ふてゐる扉の金具よ。風なきに薄笑ふちぎれ簾の骸よ、御前達はいつまで悲しい夢を見てゐる積りなのだ。間しかし安心するがよい。明日の阿漚波が此所の雪駄葛に淋しい接吻を與へる前に御前達は地水火風に歸してしまふだらう。(眼を閉じて、沈黙衰るもの、悲み、滅ぶるもの、哀れさ、生の愛惜、死の不安、太古の神の定めを守つて人の世はめぐつてゆく。源氏、平氏、それが何であらう。たゞ一瞬の榮華を誇りたゞ一時の凋落を悲しむ、哀れなるは人の世の迷ひであつた。盛者必衰の理りは野邊の草花、庭前の樹葉にさへ見られようものを。(間、力つよく)俺はこの世を捨てた、源氏を捨てた、あゝ今はこの身をすてなければならぬ。(小さき聲にて)

一念不生罪福無主本來空(歩みだして)上手に至る(無我諸方實相一切有爲。法如夢幻泡影如露亦如電。應作如是觀。)

僧の上手に消ゆるさびさしく上手より禿童あらはる。

○禿童

十七八歳、亂れたる髪を頭の廻りにて切る。刺繡の直垂れ、深紅の袴、右手に墨塗の横笛をたづさふ。

今しがたすれちがつた怪しの僧は一体何者だらう。恐ろしい眼をしてゐた。白い唇を持つてゐ

た。氣味悪い聲で「俺は世をすてた。今はこの身も捨てなければならぬ」と云つてゐたな。(ふと氣つきたるものゝ如くあたりを見まはす)おゝ此所は濱の御殿、まあ何となつかしい態にすたれたものだらう。何と心地よく朽ちたものだらう。自分はこれから死の豫言をきくことが出来る様に思はれる。あの朽ちた藁の墓の墓から、亂れた草の間から歡樂と悲哀との灰色の詩の甘さが纏れてくる様に思はれる。もつて生れた性か知らんが、自分は幼い時からごんなに廢滅と云ふことをよろこんだであらう。ごんなに寂寞と云ふことを愛したであらう。幽鬱と云ふこと、追想と云ふことは自分の命であつた。静けき夜の星の瞳から、闇に咲く黒い薔薇の瓣からほのかな夢の様に漂ひ流れる消ゆる薫りはたへずわが身に沿ふて響いてきた。かすかにきこゆる波の音、忘れがたい追憶の手さぐりに一音一音が心に浸むる。(沈黙)實に追憶はゆかしいものじや。廢滅ほど強い誘惑を持つてゐるものはあるまい。俺はかの一門と共に濱の御殿に歡樂の燈影をあびてゐた頃よりも、今日の様に白い路にたすんで歡樂を追想しながら滅びゆく平家の運命を歌ふ方がどの位身にしてみても胸の血をわかせるか知れない。三年の昔、その頃は自分の周圍は華かな色彩に満ちてゐた。その時でさへ自分の愛した女は零落の流離人であつたではないか。高樓に舞ふ傾國の姿には何等の誘惑を感じない自分の瞳も秋の夕べ都のはづれに戀慕の一曲をたんに憐みを乞ふ蒼白い女の後姿にはやみがたい慕はしさと云ひがたい戀しさとが映るのであつた。いや女ばかりではない。幽鬱を好む自分の性は持て遊ぶ樂器にさへ哀愁の音をえらんだ。自分のこの笛の響には凋落の匂ひが含まれてゐる。自分の笛の音はごんなに歡樂の最中に漂つてもそれに暗い陰影をつけなくてはやまな

い、自分はその月見の宴の時、この笛の音につれて一座が次第に白けて行つたのを覚えてゐる。そしてその笛の音は一門の滅亡を豫言する様だと誰か云つたのを知つてゐる。しかし、自分はどんなにこの笛の音を愛したであらう。黒い漆に接吻けてわが胸の血潮を注げば、このなやましい銀灰の顫律が鬱憂の皺となつて空焚の香の煙の如くひろがつてゆく、その時自分はどんなに若き日の愁ひと不思議なる音色の誘惑とに胸をとろかせたであらう。(間)あゝこの沈黙の潮の中に、明かな月の光に照されて滅ぶる夢を唄つて見ようか。(杉の根に腰をれるし、笛をしめて靜かにすすぶ。その音色は譬へばかのアルプ山の牧人が篳篥に吹く節に似て、恨み深く哀愁をたぐへ、晩秋の夕べからくさ落葉をまきあぐる風の如くひややかに聞く人の胸にひびく。あさび終りて笛をむきめ、門の傍に歩みよる。忽ち老いたる武士のねむるに眼を注ぐ)こんなところにねむつてゐる人がある。俺の笛にも眼さめなかつたのか。ほんとによく寝てゐるな。あの數多い額の皺に、手の甲の荒れた、人生の悲しい姿が見えてゐる。(間)衰へてゆくわが一門の象徴だ。(御殿を仰ぐ)あの蔓は腐敗した蛇の頭の様に傾いてゐるな。屋根石にまきついた秋草の莖は守の髪の様にもだれてゐるな。(間)うす青い更けた夜の空氣の中に、影はく夜の濡れがつめたく身にしむ様になつた。どれ夜のあけない内に濱邊の船にのるとしよう。

上手にあゆみさる。暫時して遠くよりかなしき笛のしらべ再びかすかに聞ゆ。落葉はらくと二三片門前に散りしく。やがて、門内より荒廢の翁怪しき身振にてあらはれ階段を降る。

○荒廢の翁

髮鬚は悉く黄色にして朱陀羅樹の葉を藤の糸にて編みたるを身に纏ひ、朽木の枝を更れたるを左肩にふりかけ、右手に異しの花籠を掲げたり。いづくともなく淋しき影のつきまよへるが如き態度、深き洞窟の奥よりもるゝが如き聲にて、

神と人との間の不思議をかかするなつかしき憂愁の笛の音が永遠の眠りについた俺の心を戦させた。素足で秋草の露をこぼしてゆく凋落の風の様に、また黄金の球が墮泣いて落ちてゆく遠い灰色の海波の様悲しい笛のひびきは俺の心を眼覚めさせた。(間)お、黄色は光に澄みわたる深い空の色、俺が遠い西の國の山かひに十年の苦行を終へてあの魔訶遮那山から降りてきた晩もこんな空の色であつた。それから俺は何處を如何彷徨つたであらう。山を出るその時から、頭の上にはたへず黒い星が照つてゐた。その星が俺をこの世の中に導いてくれたのだ。俺はその星に導かれて何年この世を迷つたであらう。(間)暗い影に蔽はれた冷たい沼を渡つたこともあつた。毒蛇の鱗の様に白く光る石の敷きつめた淋しい原を横ぎつたこともあつた、ある時は灰紅の帆をあげた獨木船に、錆色の溪を越えたこともあれば樹蔭一帯ない熱帯の廣い沙漠に危く死なうとしたこともあつた。桃色の貝殻が淋しう光つてゐる月夜の磯に、つかれた身をなげて、いつまでもいつまでも深い冥想からさめられないこともあつた。(間)しかし、とうとう最後に星はあの深い黒檀の森に俺を導いたのだ。氣味のわるい所であつたなあ。今おもひだしてもぞつとする。奥深くすすんだところに小さい沼があつたな。あの聖草の莖からしぼる蘇摩の靈液の様にとろくした水が寂寞の愁ひに沈んでゐた。俺がそのほとりに座をしめてはてしない歎きに沈んでゐると、突然不思議な童があらはれてきて俺に奇跡を教へてくれたのだ。そして俺はあの膿吸石と、その沼の

靈液とからしていろ／＼の花を作ることが出来る様になつた。間それから云ふものは、もう俺には樂みと云ふものはなくなつてしまつた。どんなに華かな歡樂の宴でも俺がゆくど忽ちに悲哀の影がさしてきた。どんなに咲きほころぶ驕の花園でも俺がゆけば地を映す一本の樹もない荒涼たる原野になつてしまふた。俺のゆくところからは花の影をかくした。戀の泉を涸した。かくて俺のまはりには悲みの影がさしてきた。寂しみの泣きかきこへてきた。(間)それから云ふものは俺はなほも氣の移るまゝに西をあらし南に彷徨ふた。そして北にも倦き、東にも倦いてこの地に來たのが三年の前であつた。俺がこの屋根裏に居をかまへてから夜を日についてこの里は零落して行つた。今ははや見るが如き荒廢、あゝ俺のつくる花びらの不思議なる魔力よ。(ふさ老いたる武士のれむれるを見て)あそこに老武者がねむつてゐる。後に長刀が光つてゐる。あの白刃にも荒廢の幻は漂つてゐるわい。(老いたる武士なほも覺めず)御前はよく寝つてゐるな。常世の闇の骨壺にこびりついた俺を知るまい。(老いたる武士)御前はよく寝つてゐるな。常世の闇の骨壺にこびりついた睡眠草の様に再び覺めることがない様にねむつてゐる、だが俺は御前にこの怪しい花の魔力を教へてやらう。御前が目ざめた時、御前の胸に記憶の波のわきたつ様に、ねむれる脳に染ませてやらう。(朽木の枝を花籠にさしこみ中を擾亂したる後、手を入れて一掴み花びらを取り出す。花びらはあやしき紫の光を放てり)若い女の魂が碎けて流れ出た血の色をしてゐるこの紫の花、これには若き日の憂愁の想ひが含まれる。戀の心の斜面(スロー)にしほれて散るのはこの花だ。寂寥の胸のなやみに若き男子が廢園の片隅に引き裂きむしるはこの花だ。若い女の頬の色の日／＼と衰へてゆくのを見るとき御前はこ

花瓣の力をもつとも強く感ずるだらう。(老いたる武士にその花瓣を撒きかく。いづくともなく淡き紫色の煙いでて老いたる武士をさけまく。煙きゆる頃更に一掴とりいだす。花は薄白き光を放てり)謎を失つた女性の唇の様に白けた蠟の色をしてゐる冷いこの花瓣はさめてゆく哀樂の香を放つてゐる。酒宴(さか)の席の酒甕の最後の一滴に淋しい生を續けてゆくのはこの花だ。ほのかに残るこの匂ひにさへ捨て難い誘惑はあるわい。(花びらを武士に投げかく。薄白き煙再び老武士をさけまく。煙の消ゆる頃更に一掴とりいだす。花は黄色なるほげしき光を放つ)これは神祕の帳(とばり)をのぞいた若い男子の胸にさへれた日向葵だ。甘い焔に燃へてゐる黃薔薇でもこんなに光りはすまい。是には裏切る戀の死滅が顔をだしてゐる。(老いたる武士に投げかく。黄色なる煙はまた老武士を取りまく。消ゆる頃に更に一掴とり出す。花は眞紅の重々しき光を放つ)幻に罪をおかした罪人の褐色の血がのめりついた銀盤の様な色の花、これは罪の殿堂に咬く殘虐の犠牲の花だ。御前はあの若い美しい罪人(つみびと)が磔柱にさらされた時、その後影にこの花の冷笑を聞いたことがあるだらう。(老いたる武士に撒きかく。次に籠をかたむけて中の花びらを一方に集め、中をのぞきこみ乍ら)もう花も少しになつた。残つてゐるのは何々だ。罪色赤の蓮華草がある。涙ぐんだ野菊の花がある。嘲笑の山百合がある。いづれも冷たい月の光に微笑んでゐるわい。長い間の苦みの魂のこの花弁とも俺はもう別れなければならなくなつた。御前達を捨て、俺は更に新しい神祕の力ある花を作らなくてはならない。(籠をかたむけ武士に撒きかく。左肩に籠を背負ひ乍ら)まだ寐りから覺めないのか。よい、よい。やがて明け方の光が御前の額を覗くとき、御前の意識の瞳が目覺めるだらう。その時にすべてこの俺の行爲が御前の胸に鮮かに浮ぶ筈だ。(云ひすてゝ空をまわく。何處ともなく白き霧の如きもので舞臺を模糊とす。その内に影の如くす

るくさ門内に消ゆ失す。露の消ゆる頃になりて月の光は次第にうすく、夜はほのぼのと明けはじめ。

しばらくは舞臺空虛、やがて上手より見まはりの武士あらはる。

●見廻りの武士

服装等隨意、

月が山にかゝつて空の銀色の月ばかりが他界からの消息の様に有るか無しにはのめいてゐる。もう夜があけたのであらう。あたりを見まはす、まだこんな處に寐てゐる人があるわ。(驚きたるが如く)、怪しい花舞が一面に鎧にふり懸つてゐる、白い路にもこぼれてゐる。冷たい様な寂しい様な色をしてゐる、淀の河瀬の奥深くねむつてゐる死神の頬の様な色をしてゐる。(思ひかへしたるが如く武士に眼を注ぎ、それにしても呑氣な老爺じやなあ、(明け方の鐘鳴りいづ)、お、あれは七つの鐘が。もうしばらくで内裏へ火を放たなくてはなるまい。舟の用意は出来たであらう。ねむつてゐる人はいつまでもねむりたまへ。急げる吾等は行かねばならぬ。明日をも知らぬ自分の身にも、まあ何とあの鐘の音のなつかしく身にしみごとやら。

見まはりの武士下手にあゆみさる。老いたる武士眼ざむ。起きあがり、あゆみ乍ら、

●老いたる武士

夜があけた。(あたりを見まはす)、見なれぬ花びらが散つてゐる。今しがたまで怪しい夢にうなされてゐた。夜氣にうたれて氣分をわるくしたのであらう。心地わるく身震ひがされる。早く陣屋へ行かねばなるまい。

長刀をさり上手に歩みさる。舞臺は次第に月の光うすれゆきて明方の心地よき風と共に明るくなる。
鐘の音、波のさめき、かすかなる人聲……………

幕徐に落つ。

落日と驛路

橙黄子

自分は今師團入口のコンクリート橋の上に立つて居る。

今しがたこゝへ來かゝつた自分は夕日が丁度向ふの茂みにたゆたふて居るのに誘はれて知らず知らず足を橋上に運んだのであつた。

大きな古い榎こき使はれた箒の様にばらけた其の梢に日はゆきかゝつて恰も古代金の一塊の様にユラ／＼して居る。

空はまだ明るい、けれど古い繪巻に見る様な蠟石のつや、かさをもつた城のかこひ、高檜をそれはもう晝の色ではなかつた、白いといふより灰色、覺めてるといふより夢み心……夫がより適切であらう、黄金色の光体は尙もユラ／＼して居る、ユラ／＼しつゝも箒の目を一つづつ落こんでゆく、落こむ拍子に黄色の緑がめくつてヒラ／＼、銀地が見えすく、夫が目をつたい程刺激する。

城の前に立つてる番兵がものう相に杖いて居る銃の短剣が銀光りを浴びる毎に微動する。日は次第に沈んでゆく、黄色が追々赤味を添へて行く、木立が濃かになると共に日もロートの極点に達した、否木立の底の赤黒い色にそれと推られた。

淡青の空はもう鶯色になつて居た、それが忽ち黒化する。

暮色が俄かに瀾漫した、お城の白壁も軍服をつけた兵士もペンキ塗の屯所も一齊に其中に溶け去つた。

もう夜だ、橋の上には夜のポータたる電燈がチラツキ出したではないか………。

驛路

山から八九里下つて疲れも休まらぬ足を引きずつてピーク出立をせきたてる箱馬車へ飛込んだ、客は已に二人、自分等三人は行李を座の下へ入れて余つた一つは余とU氏との間に置いた、片側に三人、片側に二人膝を互違として決してゆつくりはしなかつた。

御者があげる一鞭に馬は勢きつて走り出した、二十や三十戸余りの部落は瞬く間に駆け抜けて雨上りの冷つこい風が稻を傳つて吹いて来る田圃路へ出た、見渡すかぎり稻の波田のうねり、遙かの端に淡青う連つてるのが自分等の踏破した山々であらう——と思ふとなつかしい氣がして幾度も振かへつた、赤い禪を出して綺麗な上衣を羽織つた子供を負つて来る田舎女が時々來ると「故歩兵何等卒動何等何某之墓」と千篇一律に出來上つた石碑が次で見つかるのを除いては行けども行けども單調な眺ばかりである、U氏は靜かに目をつぶつて眠る如く然も覺めたる如く身を車の動搖に任して居た。

車の前方は忽ち騒がしくなつた、ビシ／＼と頻りに鞭の落下する響……馬は思ひ出した様に進行を止めたのであつた、いらだつて骨も砕けよと打ち下す勢に馬は又もや息せききつて駆だした、瘠せこけた脇腹には絶えず呼動の波が押寄せて居た、自分は今にして此馬は營養不足の息もたえがちなる逸物たることを知つた、そしてこんな馬車に乗り合したことが忌々しく感ぜられた。十間も來たたまらぬ頃馬は又立止つた、今度は御者台から飛下りて革紐たぐつて向ふ脛をブンナグリ始めた、自分等はもう見るに忍びなかつた、誰云ふとなく下車に一決した、豆がはみ出た足夫に小一里も荷物擔いで急ぐのは大抵でなかつた、今日は山では雨に降られる、平地へ來ては馬に崇れる碌な日でない、N氏は口説いた、M町へ着いたが四時半ばうつうふた柳の植込の長い街を轉ぶ様に停車場へ急いだ。(完)

櫻 貝

井田虎男

夢のごと散りし櫻のひと片に春の皺ひらよる濼なはたつらかな、
色々に春の休みを計りつゝ犀川端に夕月を見る、

目醒の鳴るにまかせて朝の時むさばる春の快きかな、
煙草入の底にさがせし銅錢を乗せし蕎麥屋のテーブルの上、
賣られ行く鶏の心地に籠ならぬ君の心の家に住む我れ、
我が心かくも偏しぬ師の君のうす鬚見れば涙こぼる、
嚇かせしわがひと聲に海鳥のばたくと飛ぶ心よき朝、
新らしき靴に巷を歩むごと快けれど安ならぬかな、
古らしふみ一束にして押入に片附くる時寂しさの湧く、
肋骨のあらはに指に觸るゝ時春もさびしき懷手かな、
一とせを猶生きなばと病む母が悲しきことを云ひたまふかな、
角を出せ出さずば殻を打たんなど口ずさみつかたつむり見る、
白き指つと現はれてつやゝかに生ひし心の芽をちぎりゆく、
朝風や木馬の上にもたがりて辭書引き居れば花はろゝ散る、
哀愁の海にひたりて時折は鯨の如く世を覗き見る、
落ち行く日見るに堪へざりうらぶれて歸る旅路の海に吾れ泣く、
花をもて我れの心の家建てんかくてぞ君を迎ふべきかな、
掌に吸殻置きて煙草喫む故里人と吾れは反きぬ、
泣きじやくる我が神経をつらぬきてなほ虐ぐる白き思ひ出、

春の歌作りそこねてその儘に書き捨てられてあるが悲しき、
墓のごと運動場に並びたる生徒の上を秋の風ふく、
姉を追ひて紙鐵砲を放ちなごしける日戀し春の雲見る、
髮床に順を待ちつゝ午過ぎの強き春日を器に見入る、
此奥に茸躍りてあらんなご思ひて森の入口に立つ、
指先に流れし蠟の放るゝが如く我等の仲を去る友、
はたたくと夕風に鳴る劇場の幟に迫る河岸のうす霧、
何びなく野に抜きとりし薄をは持ちて歸りぬ捨てがたくして、
無難作に残るシガラの吸殻を火鉢の中に敷へなごする、
ポケットにふと手を入れて我が觸れしペンに親しむ寂しき心、
須磨すだれ輕らにゆらぐ小座敷の紅茶の後の夏の風かな、
鉛筆の先きの鈍るに小刀の見あたらぬこそ泣かまほしけれ、
死なんとて病む胸いだき淵へ行く我れの姿を描きなごする、
何事も我れ手に附かず徒らに時計をみかく冬の夜かな、
硝子戸にあたる霞の心地よき音を聞き居ぬ湯槽のうちに、
繪筆もて追へども去らず白絹の上に黙せる冬の蠅かな、
色々の疲れし顔にわれ厭きて汽車の窓より冬の灯を見る、

青丹よし奈良の都は昆廬舎那の溜息ふかく初夏に入る、
整へし邊りを見つゝ唯一人書齋にあれば心地よきかな、
花形の切張多き障子など寂しけれども君にふさはめ、
煙草畑小一里續く高原の二尺の上の夏の雲かな、
仁丹の廣告塔を高見つゝ電車を待ちて須田町に立つ、
磯近く丘に續ける松原の木の間に見たる白き艦かな、
冷やけき油團ゆだんの上に腹這ひて舞へる蜻蛉を茫然と見る、
城廓の如く並べる河岸の土藏の壁に夕陽かゝやく、
剃刀が頬のあたりを滑り行くさやけき音の心地よきかな、
眠られぬ夜つと起きて煙草喫ふ煙の中の様々の顔、
海寂し満潮時をわれ獨り渚に立てばなく千鳥かな、
西の空彩る頃は身に迫る愁ひ思ひて海にわれ泣く、
春風は面白きかなともすれば祖父の鬚にも戯れて行く、
海苔の香や三角洲デラゴに群るゝ海鳥の白き羽より夏の夜明けぬ、
夕さればニコライ堂の御祈禱の鐘に合せて口笛をふく、
雜囊を肩ゆ下して憇なひたる小橋の下を目高並み行く、
囚人の乗るより他ほかに馬車を見ぬ春も寂しき金澤の街、

訪れし友はあらく春雨の夜の巷を歸る寂しさ、
糸をひきて松の小枝を下り來る鬼蜘蛛の背に映ゆる落日、
只一人朝湯の槽にひたりつゝ菖蒲の葉などいぢくりて居ぬ。

一種の自覺

佐藤生

歡樂に酔ふ若人は
醒めざらましとこそ願へ。

——呪ふと云ふものがあるならば
私は喜んで呪はれましょう
謗られましょう

軀殼の如冷やけき
偽善と淫樂の限世に
何の努力が要らう自覺が要らう。

呪ひ得る自信を持つ人がもしあるなら
私は其の人のために心から喜ぶ。
だけごとく其れは有り得る事だらうか。
醒めた醒めたと云ふ人は

只自分の思ひにまかせ
よしや敗慘の巷にもあれ

醒めて居る人ぢやないんだよ。
自覺し得たと云ふ人も

自由の道に彷徨ふこそよけれ。
もし萬一に——有り得る事ではないが

自覺し得たのぢやないんだよ。
夢の中の自覺は眞の自覺ぢやないのだもの

自分で自分を欺いてなら……

自覚も出来やう真我也得やう

だけご其れは眞の自覚ぢやない

真我でもない。

丁度瓶の中の虫けらが

瓶の輕重を知り得ないと同じ事

人間で居ちや到底自覚は出来ないんだ

まして人間はね

自覚し得る動物ぢやないのだから

よし其れが自覚し得るものであるとも

私は自覚も欲しない醒たくもない

此の世に生きて居るがぎり

赤い血の頬につたつて流るゝ限り

其んなものは何んのためにも

なりはしないのだから

ほんの夢想に過ぎぬのだから。

偽善者のいのり

そも眞理は何者ぞ

ヒボクリットはかくかたる

真我が嚴そかにも切口

罪業の胸の絆をたぐる時

強きものも尙ほ心に慄きを知る

此の刹那有らゆる不安を去らんがため

心の叫びより免かれんがために

偽善者は神を和ぎに用ふ

ひねもす祈り夜もすがら嘆く

漸く叫びのうすらぎし時

偽善者はひそかに紅舌をはく

もし人ありて有らゆる深き眞理もて

其の人が愚を笑ふなら

偽善者は之に答へて云ふ

ホレーシヨよ汝が夢見る哲學は

天地間ものよりも少なりとて

僅かにいつはりの心を慰む。

Sur Les Talus.

日色瑪尼生

「緋扇」

緋扇の眞紅な風の心地よさ

歡樂の燈影にすねたこの身には

扇で顔をかくした藝者の

冷たい微笑が身に泌みる

緋扇のなさけの風の肌ざはり。

「紫のつゞみ」

紫のつゞみの清き音はひゞく

あけがたの紅絹をしぼつた雲のいろ

ねむりからさめた川邊の草の中

むらさきの鼓の清き音はひゞく

「人の一生」

文苑

火ともる様にバツと生れて
よろ／＼歩いて樹の根にぶつつかり
ちよいと戀しておどつて飲んで
唄うて泣いてよろこんで
すべつて杖におひすがり

樹葉の様にころりとまゐる
人の一生の果敢なさおかしさ。

「花ふゞみ」

舞ふ花吹雪のその中に
立つたる伊達の勇み肌
あれ朱鞘にも花が散る
ゆかしいぞへなあの肩の
幅のひろさに花が散る。

「夢の館」

夢の館に迷ひこんだ

黄色い衣の若法師

真白いリラを抱へながら

深い洞窟の奥へ……

……あゝれ悲しや洞の奥から

醒めた法師の叫び聲。

白い額のなやましき

あれ三日月が雲間から

ちらりちらりと覗いて居るぞへ。

「影の戀」

花ならば散りもしよ。

露ならば消へもしよ。

心にひそむ影の戀、

消すにすべない悲しさよな。

書き夜

とらを

空席の机の上に塵淡し我れは指もて文字書きて見し、

インク壺の底に溜れるインクかす氣になりてならぬもごかしき哉、

午砲鳴ればとりし箸をも下におきウオツチを巻く君なりしかな、

雨あとの海岸行けばなつかしき踏めば音しぬ心地よき砂、

死にし蟻を本の間に見出しぬいつ頃かくも挿まりしならむ、

「雪の夜」

助六の

蛇の目の傘に降り積る

なつかしい雪、蒼い雪、

江戸紫の鉢巻に

片附けし邊りを見つゝ唯一人書齋にあれば心地

よきかな、

天鵞絨のドテラの襟に首すくめ起きすある間の

心地よきかな、

肩あげの下りたる衣を送り來し寂しき日をば今

も忘れず、

香ひよきリンゴの皮の散らばれる室に残りて淡

雪を見る、

唯一人雪むら消えの野に立ちて石投げてあれば

少したのしき、

いろ／＼の鉛筆をはさみしシースをばポケット

にさす時の心地に、

削りても／＼折るゝ色ペンを窓より捨てし心地

よきかな、

新らしきタオルに泌みし薬湯の匂ひを嗅げばな

つかしきかな、

花形の切張り多き障子など寂しけれども君にふ

四高俳句會句錄

○新年會

一月十四日蛤坂月見に於て

課題——歌留多、鍬初、縣召、嫁か君、福壽草

敗に終へし歌留多眼鏡の塵拭ふ 幽水
 林地半ば残る開墾鍬初め 同
 嫁が君尾擦れに響く立て琴か 同
 戯れに打つ小鼓惑ふ嫁が君 同
 松風に似る茶釜あり福壽草 同
 砂まじり雲母に灯榮ゆ福壽草 同
 摺り餌刻を鸚鵡呼ぶかるた夕哉 愛松
 王徳の頌歌に鍬を初めたり 同
 縣召宿の替馬知るもあり 同
 神地近く粒選り砂も福壽草 同
 青年團娛樂場開き歌留多會 奇見城
 歌留多の夜歸路歌舞伎座の戻り人 同

○二月例會

十日午後片町石川屋に於て

課題——春雪、風、囀る、

歌留多會奇遇の友も引き止めて 奇見城
 嫁が君上陸の舟人が留守居して 同
 縣召諮問のごと探湯のある 畝水
 我が君は諸手伏せませす歌かるた 同
 歌留多果ての人四散廣辻に來て 雲外
 毎年の歌留多客顔馴染みして 同
 立關の下駄振りに歌留多氣をいし 同
 奈良は塔下の鍬初や口に唄もいし 同
 御手植の松ほとり鍬初めの人 同
 國分寺の案内記も縣召の荷に 同
 机上文具華かを嫁が君弄る 同
 嫁が君明日の盛裝を枕頭に 同
 嫁が君袂に茶菓子忘れ寝し 同
 嫁が君蹴散らすや婢の隠し具を 同

神怒凶を拂ふ献舞も春の雪

愛松

淡雪や乗り合ひに花荷人のある

雲外

春の雪選佛場に響く鐘

同

海苔場へも漁長案内や淡雪に

同

荷輕さを馬跳ね氣味や風

同

淡雪のせくらぎに生洲魚飛べり

同

大風に砂搏つ比叡嵐しかな

同

淡雪に寺訪へば揮毫會のあり

同

丘の温泉宿を蒲團干す日風近き

同

淡雪や造花師の窓下屑場なる

同

囀りや粗品に世辭も客繼げる

同

巢立ち間なき鳥追ふ蠻童春の雪

同

歸依すれば俗事未練や囀れる

同

境内の畫師訪へは淡雪に鳩

同

乳を拾つる病み起ちを高く囀る

同

森の宿を訪ふ人や風の廣場過ぐ

同

春の雪江戸は名残りを深川に

幽水

藤蔓の釣橋揺れに囀りす

同

鞭轡軋り唸る大風沙風に

同

造酒司の餘戲噂に上る風巨なる

畝水

柳辻に羅宇屋の流笛春の雪

奇見城

綱網の沖三里春の雪晴れて

同

二分銀と鱒の漁や春の雪

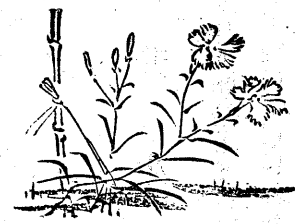
同

繪葉書も買ひ淡雪の寺を辭す

雲外

柑子試植も裏淡雪の菜園に

同



雜錄

史的名言 其二

浦井生

Bag and baggage. 英國のグラッドストーン氏の口吻より人口に膾炙するに至れり此語もとは軍隊の用語にて占領地を引揚ぐる際一物も取り残すことなく持て歸る意なりしが後には單に全然どか残る隈も無しとの意味に用ゐられ決してグ氏の創意にはあらざれども一度偉人グ氏の口より出でしより頓に流行語となれり彼の一八七七一八七八の露土戦役の端緒は一八七五年より起れる土耳其領セルウイア、モンテネグロ、ヘルチエゴウィナの内亂なる事人の知る所なるが土耳其政府は彌久曠日之を鎮定する能はずバルガンの風雲愈々險惡となり終にブルガリアも亦た兵を擧げたり此ブルガリアは人種上よりいへばタタル種族にしてホンガリア人土耳古人と同種なれども夙にスラブ風に化して露人と同様になり人民の過半はキリスト教を奉じ土耳古人とは絶えず疾視し居たるを以てブルガリアに向へる土耳古兵は焚掠虐殺を縱にし其凶暴言語に絶せり米國領事の通信に依ればマリツア河上流地方に於ては六十五箇村焦土となりバタク市に於ては約五千の男女屠られ全國を通算すれば百箇村以上焦土に歸し五萬乃至六萬の生靈は犠牲となれり

と云ふ而して當時英國の保守黨内閣は對露國の必要上土耳古政府を庇護せしかば在野の自由黨總理グラッドストーンは一八七六年 Bulgarian Atrocities と題せる論文を公にし土耳古を人道の敵と罵り政府が頑冥なる土耳其を援助するを攻撃し土耳古人の如きは Bag and baggage に歐洲より驅逐せざるべからざることを痛論せしかば人々グ氏の論を Baggage policy と名け一時の談柄とせり

Be of good cheer, brother: we shall this day kindle such a torch in England, as I trust in God, shall never be extinguished. 一五五五年英國に於ては女皇マリア即位し乍ち先代エドワード六世の宗教政策を改め羅馬加持力を以て國教と定め次で新教徒の大迫害を行ひ三年間に二百八十四人を死刑に處せりされば歐洲諸國の人大に愕き女皇を呼んで Bloody Mary といへり勿論宗教上の死罪は焚殺なれども Bloody は殘虐と同意に用ゐたるなり此際の事なるがウウスタアの監督 Hugh Latimer はラツクスフアドに於て倫動の監督 Ridley と相列びて焚殺せられんとし火勢の熾なるに及びラチマアが從容としてリッドレイを顧みて激勵せる語なり

Before this time to-morrow I shall have gained a peerage or Westminster Abbey. 一七九八年八月一日ニール海戦に於ける英提督ネルソンの言なりといふ Westminster は英國の國士を國葬と爲す所なれば此語の意明日の今頃までには戦に捷ちて功に因り貴族に列せらるるか國葬にさるるか決定し居る得べしといふなりされども此語は好事の徒の捏造にかゝることを明にして此虚傳の出所は次の逸話ならんといへり即ち幕僚の一人提督に問ふて曰く我等若し此戦に克たば世人は

何等の語を以て我等を賞讃するならんかとネルソン笑ふて曰く今日の場合に於て毫も「若し」といふを要せず我等が勝利を疑ふことやある但し何人が生残りて戦の談を爲すかは別種の問題なり

Beware of the Ides of march. 古羅馬の歴法にては新月を以て月の始と爲し之をKalends (此語より今日の Calendar 出たり) と云ひ満月の日をIdesといひイデスより九日前を Nones と呼び一月の内に此三の基點を設けて時日を呼ぶ慣習にして例せば四月のカレンドの四日といふが如く我等が來月の第二火曜日といふに似たり紀元前四年二月十五日ルベルカル祭に於てマルクスアントニウスはケーザルに王冠を捧げんとせしにケーザルは早くも人民の感情を察して之を斥け猶三月十五日の議政官會議に於て外國に對する場合に限り王號を用ゆるの可否を審議することに決せり然るに此事件以來ケーザルは國民猜疑の中心となり共和政治を顛覆して君主獨裁政治を樹立するの野望を抱懷せるものと認められ終にマルクス及びデキムスブルツス、カシウスロンギヌス等の自稱愛國者はケーザルを殺して共和政治を累卵の危より救はんことを圖り議政官約六十人之に與る彼等は三月十五日ケーザルの議政官會議に臨むを機として事を擧げんとす然るに此秘密は多くの人の知る所となり童謠大に行はる曰く Cave Ides martias (三月の十五日を警戒せよ) とケーザル以て意となさず愈三月十五日の朝に至りケーザルの妻カルプルニア前夜悪夢を見たりとてケーザルの出場を切諫しケーザル終に家を出でず謀徒の一人デキムスブルツス馳せてケーザルの第に到り議政官既に集まりケーザルの出席を待ち居るを告げ其遅刻を責

むケーザル之に告ぐるに故を以てすブルツス大に笑ふて曰く閣下夢を信するか閣下にして夢を以て公事を廢せば人の嗤笑を如何とケーザル曰く吾過てりと直に出で、ポンペイウス劇場(議政官の會場)に至り遭難となれり

Blicher or night. 一八一五年六月十八日ワートテルローの戦に於けるウエリントンの語なり此戦は午前十一時三十分頃より開始せられしがウエリントンは午後二時迄には普軍の總督ブリュヘルとの戦鬪に参加すべき方略なるを以て僅々二時間餘を支へなば同盟軍の大捷となるべきにより兵士を激勵して其陣地を固守し再三佛兵の攻撃を撃退せり然るに二時を過ぎ三時を過ぎ四時に至るも猶普兵の影だに見えず一方に於て佛兵の攻撃は刻々猛烈を加へ來り英兵の陣地殆んど支持する能はず參謀の一人ウエリントンの意見を問ふウエリントン答へて曰く今日の策たゞ一あるのみブリュヘルか夜の來り救ふあるのみ最後の一人となる迄踏み止まれと四時過に至り普兵來着し挾撃して大にナポレオンを敗る而して何故ブリュヘルは如此遅延したるや從來の説明は前日大雨道路泥濘のため進軍に大支障を來たせりといへりされども此説明は以て婦人小兒を瞞着すべきも具眼者の満足を得べきにあらず何となればブリュヘルの居りしワートブルとモンセンジアン(ワートテルロー前面の高地)との距離は僅に十三哩に過ぎず若し早朝(夏日のことなれば午前四時には運動を起し得べし)ワートブルを出發せば如何に道路險惡なりとて午後四時までかかる理斷して無きなり蓋し普兵の如此遅延せる理由は二ありて一は用兵上の錯誤一は參謀長グナイゼナウの狐疑なりき若しブリュヘルが最も前進し居たるチエルマンの部隊をして日出に於て

前進せしめたらんには午前十時乃至十一時には既に戰場に到達したるや明なるにブリュヘルは後方二哩に在りしビュローの部隊をして先頭に立たしめたりされども是には多少の理由ありて此部隊は前々日のリニーの戦闘には極めて輕微の損害を蒙りしに止まるを以て特に此部隊に先鋒を命じたるなりされども是は大遅延の理由となすに足らず實は普軍の參謀長グナイゼナウはウエリントンを信せずウエリントンが果して踏み止まりてナポレオンと再戦するの決心あるや覺束無く感じ若し普軍が最困難なる側面展開を行ひウエリントンは遠く退き去りたる場合に於ては普軍は全滅の慘狀に陥ること明瞭なるを以てグナイゼナフはブリュヘルに説き暫く英兵の模様を窺ひ居たるなり而してワートローの方向に於て砲聲天地を震撼し事急なるに及び強行軍を起し揉みに揉んで戰場に馳せ付けたるものにて一般歴史に記せる普軍の努力は事實相違無しと雖も是は進軍に移りたる後の事に屬せり

Born and educated in this country. I glory in the name of Briton. 英王ジョージ三世が王の第一議會に於ける勅語なり先是一七一四年女皇アンナ殞落し嗣なし於是一七〇〇年議會の決定せる皇位繼承法に依り英國元首は新教徒たることを要するを以て獨逸のハンノーフェル選帝侯ジョージ一世を迎せり王は是時實算既に五十五純獨逸人にして英語を知らず一七二七年王殞し皇太子嗣立しジョージ二世といふ此王が父王と共に英國に迎へられたる時は既に三十二歳にして亦英語を語ること能はず次の王ジョージ三世は一七三八年倫敦に於て生れ英國に於て教育せられ純英人なり故に王に是語あり

Brother, I am too old to go again on my travels; you may if you choose it. 英王查理二世の皇太子ヨーク公ジェームスは熱心なる加持力信徒にして夙に帝王權神授説を抱懐せるに因り常に王に説くに議會を壓服し舊教を以て國教となさんことを以てす王之を聽かず是語を以て太弟を慰諭せり查理殞しジェームス二世立つや其の政見を斷行せしかば終に一六八八年の革命を惹起せり

Business to-morrow. 古代希臘のテーベ市に於ては貴族黨と民主黨の軋轢ありしがスパルタの將フライビダスが北方のラリントスを討たんとして途テーベを過ぎしに當り貴族黨のレランチアデスは竊に之を訪ひて謀を定めスパルタ兵を誘ひてテーベを占領せしむ是時以來スパルタはテーベに衛兵を駐め貴族黨はスパルタの兵威に倚りて市政を握り民主黨を迫害せしかば民黨の有志は多くアテネに通れたり(紀元前三八二年)テーベ並びにアテネなる民黨は熱心恢復を圖りし後三七九年に至り彼等は一策を案出し貴族黨の信任を得て内閣書記官となり居れども志を民黨に通せるフライリダスは貴族黨の首魁アルキアスを始め其幕僚を其家に招待して盛宴を開き一舉して貴族黨を殲さんとす當日早朝レビダス、メロン等の志士七人(一説に因れば十二人)アテネを發し薄暮テーベに着し機の到るを待てりフライリダスの家にては宴漸く酣なる頃アテネより來れる急使ありアルキアスに一書を呈せり是アルキアスの舊友にしてアテネの高官たる者早くも志士の密謀を探知して之を告知せるものなり危機一髮志士の生命風前の燈といふべしフライリダスはアテネの使なるを聞き畧ば書中の件を悟り殆んど色を失へり然るに天なる哉アルキアス既

に酔ふこと甚しく衆亦た酔へり興を妨ぐることを欲せずアルキアスは書を受けるも之を讀まんとせず使者怒て曰く書中に記す所事極めて重大緊急なり何んぞ速に之を見ざるとアルキアス之を煩はしと爲し曰く要務は明日の事にせん衆曰く可なりと使者乃ち退くフィリダス始めて心を安じ之に應じて曰く大に好し大に好し今や歡樂方に央ならんとす乞ふ更に舞妓を進めんと忽ち妓女の一群坐に入り來たる是ペロピダス等の志士女装せる者なり突然として貴族黨の醜類を刺し城内の志士之に應じて起ちスバルタの衛兵を逐ひテーベの民政を復興せり

By seizing the Isthmus of Darien you will wrest the keys of the world from Spain, ウラルターローリー (Walker Raleigh) が女皇エリザベスに献せる策にしてダリエン地峡とは今日のバナマなり今や合衆國は凡ゆる手段を弄してバナマ地峡開鑿の權利を獲取し數年ならずして工事完成せんとす地下のローリー如何の感やある

Caesar had his Brutus; Charles I, his Cromwell; and George III may profit by their example. (The soul cried the Speaker) If this be treason, make the most of it. 米國獨立戰爭に先ち米人は一七六五年 Virginia Convention を開き英國の政策を攻撃せし時同州の代表なる有名志士 Patrick Henry の演説なり古羅馬のケーザルは共和政治を顛覆して私慾に耽らんとせし結果ブルーツス出で之を殺し英國の查理一世は暴政を行ひしたため革命を惹起しクロンメル一派の爲め斷頭臺の露を消えたり我等の王ジョージ三世陛下は此等の先例に鑑み給はんことを望むと (議長は反逆よと言を遮りしかば一轉して) To make the most of it (最も有益に此例を用ひられよ) と結びり。

Caesar's wife should be above suspicion. 紀元前六二年の事なりケーザルの第に於て Bona Dea の例祭行はれたりボナデアは Good soddass の意にて森林の女神 Fauna を云ふ此祭は宗務長官の第にて行ふ例にてケーザルは此職に在りしたためなり又此祭は夜間宗務長官夫人の主宰の下に婦人のみにて執行せられ一切男子禁制の規定なり然るに Publius Clodius といへる平素ケーザル夫人の愛顧を蒙れる男當夜女装して第中に忍ひ居たること暴露して物議を惹起しケーザル夫人ボンベリアはスルラの孫女にしてボンベイウスの遠き血縁なるを以て一轉して政黨問題とならんとせり於是ケーザルは斷乎としてボンベリアを離別せり或人ケーザルを詰りて曰く彼女に不都合の行爲ありしや否確證なきにも拘らず離別するとはあまりに酷ならずやとケーザル答へて曰く苟くもケーザルの配たるものは人の疑を受くる様にては相成らず事實の如きは問ふの違なしと

Carnot has organized victory. 佛國革命時代に於て議會は國王路易十六世を死刑に處し檄を各國に傳へ諸國に於ても革命を起さんことを勧誘する等暴狀甚しかりしかば一七九三年佛國に對する歐洲大同盟起り四方より佛國に進撃す於是佛國の國民公會は祖國頻危の布告を發し十八歳以上四十歳までの男子を徵發して兵七十五萬を擧げ婦女小兒は被服綿撤絲の製出に従はしめ至る所に兵器製造所を設け寺院の鐘を改鑄して武器とせり而して軍政の局に當れるカルノーは強制徵募法を厲行し自由平等論に頓着せずして軍隊の規律を嚴肅にし又人才を地位年齢に關係せずして拔擢せしかば士氣大に振ひ將校の位置は貴族の獨占となり居れる外國軍は到底銳氣充滿せる

佛軍の敵にあらず次第に撃攘さるゝに至れりナポレオン之を評してカルノーは佛軍の捷利を編制せりといへり因てカルノーを呼んで勝利の編制者といふ因に云ふ一八八七年より一八九四年佛國大統領に任せしサヂカルノーは革命時代のカルノーの孫なり

Carry my bones before you on your march, for the rebels will not be able to endure the sight of me; alive or dead. 死せる孔明生ける仲達を走らすの類なり英王エドワード一世(一二九三—一三〇七年)の時代には英國と蘇國との交戦殆んど歇む時なく蘇國は再三英兵の爲め敗られ蘇國王は英王の宗主權を承認し幾もなく復た兵を擧ぐるの有様にてエドワードは蘇國王は交も蘇國王 Balfour, Bruce, Wallace を戦へり一三〇年蘇國は復た背きしかばエドワードは之を討たんとして出陣し途に病を得終に起たす王の臨終の際皇太子エドワード(二世)を召し兵を還さず直に蘇國に向ふべきを命せる語なり

Carthage must be blotted out. (Delendum esse Carthaginem) カルタゴは第二次ポエニ戰役(二一八—二〇一)の後發憤國力の挽回を努め數年にして創痕既に癒えスキピオを和約に因り五十年賦を以て支拂ふべき償金を皆納せんことを申出て羅馬をして喫驚せしむるに至れり時に羅馬に名士 Marcus Porcius Cato と云へるあり極端なるカルタゴ討滅論者にしてカルタゴを亡せざる限は羅馬人は枕を高うして眠ること能はざるを確信し彼の熱心なる議政官に於て演説を爲す時は其問題の何事なるに頓着無く其結果には頓に口調を改めて諸君は如何思はるゝや吾は是非ともカルタゴを滅さざる可らざるを信すと當時有名なる談柄となれり

Come and see how a marshal of France dies on the battle field. 一八一五年六月十八日のワテールローの戰にて佛國の元帥ネーの怒號せる語なりされどネーは討死の手法は示さずして止みにき Courage Friends! We shall not want bread now, we are bringing you the Baker, the Bakeress and Baker's Boy. 佛國革命の初期の事なり一七八九年十月五日朝巴里に於て飢に泣ける勞働者の妻數百人市廳(ワテール、ド、ビュ)に闖入し叫で曰くバクシー(國民議會の議長)を瘞セラフアエット(巴里義勇軍の司令官)を出せ麵麩を與へよ麵麩を與へよ狼藉甚し會者 Stanislas Millard と云へる男彼等を教唆して曰く汝等は無用の時間を徒費するものかなベルサイユへ行き國王より麵麩を貰ふべしと婦女の群乃ちベルサイユに向ふ之を聞きて數千の暴民婦女の後を逐ひてベルサイユに赴き徹霄大雨を犯して市中を彷徨し翌朝終に王宮に闖入す王は暴民の要請を納れパリに移るに決し暴民の群に包圍せられ宮を出づ暴民勇み立て此語を叫びつゝパリに入れり史に之を十月六日の「喜ばしき入都」と稱す麵麩焼とは國王麵麩焼の女房とは皇后麵麩焼の子供とは皇太子を指すなり。

漫言

劍道部南下に就て

尾山城頭の松風暮秋を傳へ、鴉背の夕陽晚寒を生ずる悲秋九月、校庭の群芳徒らに衰へ、悽悽たる蛩語は吟懷を喚ぶ時誰れか懷舊の念に驅られざらむ、況んや我部の先人が悲憤の涙に染めなせる西の方洛陽に於ける敗衄の繪巻物は永久しへに我等八百校友の胸に深刻なる追憶を興ふるをや。

想起す數歳の昔、我部十餘鐵血の先人は嵐峽の秋深き時、京洛の牙城に迫りしも空しく功を一簣に缺き、痛憤の涙を雄々しき頬に注ぎつゝ、仇を後人の手に委ね悶々の情を双腕に抱きて校門を後にした。

春行きて秋來り、秋を送りて春を迎ふる事幾

指して飛べり。

無聲堂裡又劍戟の響起り、鐵蹄蔓々の聲を成し、嘗膽三旬の練習は成りぬ。然れ共未だ時至らざるを如何にすべき、好敵は我より申込める條件を容れず我部が敵の條件に對する再度の讓歩も其効を奏せず交渉は遂に破れたり。我部戰士の心中の苦悶は校友諸君の想像に委すべし。さはれ逃るゝ者は追ふ可らず、又嘗膽の秋を重ね、來るべき秋に泰平の夢に耽れる京洛の公達原を一蹴せる時、願くば共に立つて凱歌を唱へられむことを祈る。(金子要人)

判斷と省察

佐藤 生

○自分は餘り自己といふものを考へ過ぎて居る。あまりに内省的氣分が勝つて居る、或る行爲

度。時は至りぬ。第二の先人は立てり。白箭は遠く西の空に飛び、無聲堂裡我部健兒が鐵蹄の響は慘しき自然の權威に壓迫せられたる北國の一隅に翼を張りぬ。さはれ未だ時は熟せざりき、白箭は遂に敵の退くる處となれり。かくて第二の先人も又任を我等後人の手に托し涙をのみて金城の地を去れるなり。彼れを思ひ之れを憶へば我等の胸には沸騰り立つ血潮の高鳴りに高鳴りて止まざるを如何にせむ。

天を撃つて立てる白嶺群峯の秋色は徒らに褪せ、滿目蕭條たる加州の平野を北に走る犀川の流れは空しく枯れて、北國の森羅萬象は正に凋落の冬を迎へむとする時、旅窓の夢圓かならざる先人の仇を復すべき時は來りぬ、好期は逸す可らず、二十の士は眈を決して立てり。唯に血を盛る」悲壯なる合唱の聲を餘所に聞きつゝ、南下の議は成り、四十四年霜月白き箭は洛陽の空

をなして居てもすぐ自己を内省し去つて恁んな事はといふ氣になる。そのために多くの場合、何事にも死身になれぬといふ動搖する不安が付き纏うて來る。そしてこの性格を自覺しながら實行を續けて居るといふのが現在の苦しい自己である。此の苦しい自己から遁れ様とするストラグルの中に自分の新しい經驗や人生觀がある。其處に判斷や省察がある。もがいてく醜い現在の自己からぬけ出さうとする總ての努力が自分の生活のコムボジションの大部をなして居るのである。

○自分は追想に生きたい。淡々しい少年行を飾る思出のかすく、少年から青年期に入る頃の心の状態、さう言ふものを泌々と誰かに語つて見たい。一人で町を散歩して居る時や、歡樂の後の淋しい中などに居てかう思ふ事が暫々ある。あの頃の無邪氣で、純潔で、初々しい情緒、現

在の裏さられた自分と較べて或る一種の鋭い皮肉を感じずには居られ無い。裏さられた自己、邪路に迷つた心、自分は然し決して失望しない。眞正の自己はこの思想界の革命をつき破つて出て来るのではあるまいか。自分は憊うでも考へて自ら慰めて居たい。

●人間は誰れしも其の人その人の人生觀を有して居るものである。其の中に彼はすべての事を盛つたり壞したりして生活して居るのである。要するに其の人獨特の人生觀があつて、修養や教育、社會、習俗等によつて制御され統一されて行く。勿論出世間的、超自然的、又は習俗や或る意味に於て道德までも脱却したもの等があるかも知れぬが其の人獨特の、換言すれば完全なる自己最善なる自己と言ふ標的に向つて樹てられたる人生觀に違ひ無い。誰でも自分で自分を背かうと欲するものは無い、たとへ結果は往

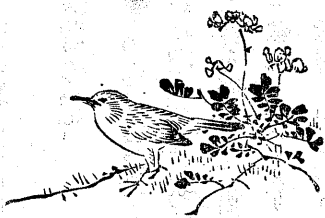
往その方へ導かれて行く事があつても。●肯定か、否定かと言ふ人がある。何時でも肯定でなければ否定、否定でなければ肯定だと言ふ理窟は無い。否定と肯定とはすべて絶對的雙面の關係を有して居るとは限らない。人間はかく物事の解決を求めたがる癖があつて困る。否定もせぬ肯定もせぬ、只ぶつかつて見る。敲いて見る。量つて見る。それが却つて面白い。新しい理解、新しい眞理と言ふものは往々かゝる場合に見出さるゝものである。

●白熱度の閃き、感激のライフ、今日の新しい吾々が、さうしたものを要求したのは既に過去の夢である。刺戟や氣分を喜んだ吾々は今やあまりに醒めて居る。すつと核心的な、手答へのある、所謂精神界のドン底から来る叫を聞いた。多少形式に盛る上の都合はあつてもネオロトマンチシズム、ネオナチュラリズム、或は近

け窮めて行つて自己の人生を築いて行きたいと思ふ。

代の享樂主義の文學等其の流派は何であらうと關する所が無い。とかう自分は考へて居る。

●自分は此の頃考へて見ねばならぬ事が多くなつた。今迄やつて來た行爲や、抱いて居た思想や信仰等がたとへ無邪氣ではあつたとしても餘りに輕るはづみで、感しやすく、信じやすかつたと言ふ事に氣が付き出した。一舉一動、一思一念、自分は今迄よりもより意味深く、より効果的にやつて行きたい。この人生が無意義に終らぬ様に、無限から無限に續く人生の一宿驛として通過せられぬ様に、自分は出来るだけ、もがいて見よう、戰つて見よう。さうして得たものならそれに甘んせねばなるまい。行く處まで行つて見んであきらめて引き返す人は弱者である。これでおしまいたと言つて絶望するのは餘りに自己を無視して居る。絶望は最後では無い。最後の最大級といふ事を心懸けて行けるだ



雜報

叙任辭令

明治四十四年十二月十一日

叙正七位

書記 吉村 政行

粟ヶ崎演習の記

十二月二十六日

生徒監補助ヲ命ス

講師 小林 平藏

二月九日、雨上りの空に雲が烈しく飛び亂れる。午前九時、朗かな喇叭の音につれて、全校七百

叙勳四等授瑞寶章

教授 浦井 鏗一郎

の健兒、武装に身を固めて、肅々として廣坂通

叙勳五等授瑞寶章

教授 高橋 郁治

を北に下る。一隊は、新橋より川向に折れる。

明治四十五年一月三十一日

體操副科劍道師範 北村 義直

我隊は其の儘、雪解の川に沿うて、歩を進める。立木の蔭、家の蔭に見え隠れつゝ、先の隊は次第に遠さがり行く。やがて其の影も遠く没して

依願囑託ヲ解ク

叙從五位

教授 三竹 欽五郎

了ふ。勇ましい豫期をいだいて、我隊は只黙々

叙正六位

同 八波 則吉

として進む。寒い／＼海風は、面を吹き戎衣を

叙從六位

同 岡本 勇

吹いて狂ひ叫ぶ。濱の松林が見える。砂山に達す

叙從六位

同 相良 益次郎

る。逸り男の眼が輝く、胸が躍る。とある漁

村を背にして、隊伍を整へる。眼は期せずして前面の松林に注ぐ。五分たち十分と經つ。ぼつりと黒い影、と見る／＼砂濱の上に敵影が立ち並ぶ。すはやとばかり、指揮官の一令の下に、進んで地形を利用して散開する。突如砲聲が一發、

い戰士の歌は、いかに楽しく初春の空にひびいたであらう。(をばり)

南下野球軍慰勞會

漁村の閑寂を破る。一隊又一隊、敵は次第に加はる、我を襲ふ砲火は益々烈しい。何かは撓まず應戦する。距離が接近する。突撃に兩軍指揮官の叫びが渡る。突つ込め！烈しい白兵戦が演ぜられんとする刹那、休戦喇叭の響、唸朗として鳴り渡る。休憩を與へられて兩軍の戰士、三々五々、相混じて、思ひ／＼に別れた。民家の庭、垣の蔭、砂松林、濱の舟かげに、散らばつて晝食をすま

たい運命だ、僕等がかう叫びたい。大擧南下の一隊は無念嵐山の落花となつた。僕等は此れを語るに、あまりに高潮した感情を如何ともすることは出来ん。だがこれが只あの晴れて後もない春霞の實ない空虚であつたらうか、いつか消えてゆく泡沫の悲哀であつたらうか、僕等がかうした聲に強い強い反抗の叫びを與へたい。偉大なる何等かの物を残さずは止まないといふあの意氣の發現を想はざるを得ん、吉田原頭に殘した健闘の姿を誇らすには居られない。

海は暗く荒れて、波音高く磯に寄する。やがて集合ラッパが鳴る。隊伍は再び整へられて、金澤の城下をさして進む。行く／＼勇まし

こうした意味で一月の三十一日、無聲堂で南下軍慰勞會が開かれた。集會した人々は割合に少

なかつたけれど、是れに對して吾々は何等の反感も不平も持たない。一片愛校の誠意を抱いた人々が語り合つて、あの涙に泌みた選手の頬を、聊かなりとも晴れやかにしてやることか出来たなら吾等の使命は達せられるのである。先づ井上君より開會の辭。

「余は南下隊に加はつた、數字の上には明らかに敗れたが然し衆目の見るところ、レコーダの示すところは飽くまで吾軍の堂々と敵軍を壓迫した意氣の旺盛なるを示してゐる。勝負の數は窮極の目的ではない。嚴然と動かすべからざる吾校精神の發揚を其の目的とすれば吾南下軍は其尤も重要な意義に於ける勝利を獲得したものである」といふ意味の詞であつた。

校長登壇、此度の敗戦は何等残念の必持は起らない。由來今回の大會に選手を参加せしむるにつき余の念頭にあるものは、決して勝負の如

何といふ点に存せずして只選手の活動が果して豪膽に、沈著に鋒を交へるや否やといふ点にあつた。故に敗戦を悲む戰士諸君の衷心には飽くまで同情の念を拂ふか、負戦を惜むの念は更に無」と温言人の胸に徹した。

山田君選手を代表して登壇。負は何處までも負である只活動を後日に待つて下さる様にといふ、決然たる挨拶であつた。僕は君の言を聞いた時、卿等の使命は既に全ふせられたんだ、と言ひたかつた。

八波先生登壇。「八波はまた泣いたらうと或人は言つた。うらうが自分は今度は泣けなかつた」と冒頭僕等をして先生の胸底にひそめる柔かい情熱を想起さしめられる。「今度の戦二回とも結果が判明した時直ぐに京都の戦士へ一通宛電報を打つて、胸中の感じを言ひ送つたが後になつて聞いて見ると僅かな齟齬から電報は何れ

も在京の人々に達しなかつた。事は違ふが四高

の敗戦は恰も是れと同一徹を踏むである。点數に於ては負としても新聞の記事や目撃した人々の談などによつて其戦闘振りを想ふと恰も電報が届かなかつたと同じく、必ずや瞬間のはづみに於ける怪我負であると信じたので、此度はどうしても泣けなかつた」と。僕は先生の温かい詞に却て泣かざるゝのであつた。

星野先生登壇。野球の眞味を説かれ、現代野球界に於ける趨勢につきて論を進められ曾て問題となりし東京朝日の怪文字を正され、之れに伴ふ弊害を防止して模範的運動となすべしと懇切に述べらる。

次で新木堀兩君の熱烈なる慰勞の辭ありて閉會。

時習寮より

大茶話會記事

二月十日。冬枯れにひそむだやうな寮は、此日午後になると何時になく色めいて來た。そわそわして落付きかない。やがて電燈のともる頃になると、あそここの室で目新しい人々の顔が集まつて愉快そうな談笑の聲が廊下まで洩れて來た。六時が打つと、彩旗に輝く食堂へ人なだれを作つて流れ込む。目がくらむばかりにぎつしり詰つて、身動きもならん程の混雑である。一としきり靜まると、山田寮委員より簡單に挨拶があつて、直ちに會食を始める。箸を一寸置いて見上げると、スペート先生の姿が會場に異彩を放つてゐる。腹の鼓が出来た人から追追と引けて行つて、やがて人なだれは又も無聲堂の方へ――。

(鳴)

七時、人々の数は愈が上加はつて、廣い無聲堂も幾つかの電燈の下に密な一群が形づくられた。破るゝ様の雜沓だ、先づ新木寮委員より開會の辭を述べらる。凡て物の存在は是れを形成する分子の統一による、其各分子の不調和はやがて物の破壊を起す、八百校友の親睦調和は四高の存續を全うする最大要件であると説いて降壇。

次で校長登壇、學生時代に於ける經驗よりして、勉學上人格修養上又郷國思想の欠点救済上に於て、寛容度量を修練する上に於て、日本人の通弊たる時間的觀念を養成してパンクチュアルな人物を作り出すことに於て、寮生活なるものが如何に其効果をあげ得べきかを述べられ事情の許す限り寮生活を送るべきことを奨励せらる。七時四十分。

三竹生徒監登壇。北米合衆國現大統領タフト

氏が目下企圖せられつゝある歐米各國に聞ゆる生活難の聲を救濟せんとする計畫につきて先生は「物價騰貴生活難の叫びは是れ外部より來る原因なれば、是れが最良の救済策は内部的に根治するを計らさるべからず、又何事に於ても手段にのみ拘泥して内部より改造せざれば其効を収むること能はず」と警告を與へらる。八時。

寮生鳴澤君登壇、吾人は團樂の樂を味ふに當り單に其表面に流れたる情調、表面的の事實によつてするのみにあらず進むで其背面に見出さるゝより深き現實生活の妙味を鑑賞玩味せなければならんと論ず。八時十五分。

寮生福永君登壇。君は吾寮生活の一斑を説かんとす。遠き古代日本より例を引き史上に表はれた幾多の事實を捉へ來つて、吾寮の哀史、超然主義の解釋をなさんとするのである。稍倦み初めた聽衆は此頃より喧騒を極め、後方の一

部より盛んな野次の聲をあげせかけた。轟々耳を聳するばかりなる中に降壇。八時三十分。

通學生堀君登壇。理想と吾人との間に廣大なる距離あり、此理想に向つて突進する中に生ずる幾多の負傷者は果して何によりてか其慰藉を得る。吾人は只偉人の追懷あるのみと説き更に、吾四高の縦とし横として至誠、超然あり光輝ある歴史なしと悲觀すべからず、歡喜の追憶を慰藉としてあくまで猛進せんと、言々血潮迸るの感があつた。

時に突如として壇上に表はれ只五分の猶豫を與へよと叫ぶ人があつた。中納君である。時習寮は少なくとも五百を收容する設備を有せざるべからず、四高の意氣の消長は寮設備の如何によると、更に鋭鋒を轉じて現今の教育界に一痛棒を加へた。是れに對して校長より更に愛嬌演説があつて餘興に移る。是は寮生の心血を注い

たものだけあつて何れも大成功であつた。

(一)秋月竹内兩君ハモニカ、澄むた洋樂の調べに人々の聽覺は先づ酔はされた。(二)琵琶劇石童丸(北寮階下)、寥々たる日本劇壇に一新生命を開拓したといふ前置が濟むと、やがて傍にころがす様な琵琶歌が聞え出す、さつと幕が引かれた。目も覺むるやうなバックに石童丸と母はしづ／＼出て來る、歌の進むにつれてデュエスチユア見事に父子の再會母の死四幕遺憾なくやり終つて觀者をアット言はせた。(三)明笛(小林君)幕が閉ぢられたと思ふと直ぐそれにつれて澄み切つた明笛の音は凡ての人の官能を奪つてしまはなければ置かんと云ふ様にひやく(四)加内君詩吟、君の吟詩には余り接した事がなかつたが今日は喧轟たる聲援の聲を聞いても如何に君が堪能の妙を有してゐるかを想像するに難かるまい。(五)松見君薩摩琵琶、君の妙技には

すでに定評がある、満堂の人は凡て其の張りきつた美音に恍惚となつた。かくて觀衆の情調はすでに絶頂に達した、彩旗の下に輝く電燈、煙つた様に暖い空氣、其中で酔つた様な赤い顔がしきりに動いてゐる。(六)隅田川(南寮階下)、近頃寮で非常な勢力で傳播して來た隅田川の一節、お揃いの袴上下で手に持った扇子一上一下につれて唸り出す調子は、どうしてもこれが寮生のわざとは思はれなかつた之か 目出度終ると次が(七)お半長右衛門(中寮階下)、寮餘興部(一)豪の者お揃へだ。で始めから僕等の期待してゐたものである。僕はかうした一群の人達の巧みに演せらるゝを見て、四高劇界の悲觀すべからざるを思つて痛快に感じた、舞台に活動してゐるアクターの方へ、感心したとばかり諸先生の視線は注がれてゐた。(八)白虎隊(南寮階上)、白虎隊の勇壯な姿を目の前にまぎ／＼見せられ

て、只管悲壯な感に打たれた、力の這入つた男性的の見物として當夜の一異彩を放つた。(九)沖田池田瀨下君ハモニカ合奏、今瞳孔に濃い色彩が映じたと思ふと今度は賑やかな合奏の快調は浮き立つ様に耳朶に響く。(十)腹躍り(中寮階上)、一刻の中に人体の腹部は變じて面部となり、かうした異形の人々が異様な踊りをする、觀衆はまた腹を抱いて大笑する。(十一)熊谷(渡邊君)、君の謡曲はいつ聞いても人を魅する力がある。(十二)泣面に蜂(一年生団体余興)。急造の背景と不整頓な道具とを用ゐてあれほどまでに手際よく、又題意を鮮明に演じ終せたのはアクターの巧妙によるに外ならない。

時はいつか知らぬ間に更けた。人々の顔にも疲れた様な色が漂ふて來た。興趣は果てしもなかつた、後に殘された幾多の計畫を惜むで閉會せねはならなかつた。千家寮委員は立つて靜か

に閉會の辭を述べる。次で四高及び時習寮の萬歳を各三唱した後で群集は思ひ思ひに歸途についた。

(鳴生)

靈ならざるべからず。心を離れ靈を忘れては校風の意義亦果して奈何。

庭球部を送る

時や風和かにして草芳し。柳條依々として糸の如く、吹かれては纏れ、纏れては靡く。城下の春は寂然として濃かなり。

人は自然の靈に感觸する時、端然として絶大の權威に襟を正す。猛烈なる自我の慾求影を滅する其の刹那、人生一義の閃は稻妻の如くに自然の懷より流れ來る。吾人は此の刹那の感想に生き之を唯一實證として永遠の道に旅立たんと欲す。其處にはあらゆる自己の陥欠をも充たし、社會の要求をも解き得る或る者を暗示すればなり。八百校友の發足点は心ならざるべからず、

戦つて勝つ、未だ難きにあらず。破れて戦ふ、

其の甚だ難きを知る。勝利の嘆美は要するに努力に對する報酬なり。然れ共意氣と技倆との以外に戦勝の裏面には伴運の伴ふあり。伴運は偶然の事、價值判断の圏外に脱却する者なり。嘆美する勝利の中には尙ほ多少の偶然性を伴ふを免れ得ず。さはれ破れて戦ふは然らず。衰殘の氣力に鞭うつ、其處に悲痛なる努力の影あり。敗衄の骸を心胸の熱火に焦す、其處に不屈の精神と耿々たる氣意との輝きあり。嘗膽の苦を積む、其處に不斷の向上あり。嘆美は努力の報酬なりとせば吾人は勝利者の前に先づ破れて戦ふ努力と意氣と向上とを衷心賞揚せざるべからざるなり

幾度か立つて破れたる我が庭球部は再び立て

り。朱に染めなす同部歴史の陰には綿々として
盡きざる先人の鬼哭あり。幽涙紙背に濺いで怨
魂今尚ほ行く所を知らず。城下の一夜悲風松樹
を呪ふては愁々として鬼火徒に燃ゆ。あはれ後
人若し涙あらば盃んぞ一掬の手向をなさざるを
得んや。

城下自然の靈は絶えざる啓示を垂れて行く可
き道を教ふ。血に湧く健兒が胸には鏗然として
此處に響あり。況んや先人の幽魄今迷ふ。彼等は
泣然として弔魂の涙を墓門の花に灑ぐなりき。
昨秋九月新チームなりし以來其の耿々たる意氣
は敗殘の餘瀝を燃やして衝天の叫を揚げぬ。不
撓の努力は繰り返されたり。吾人は夙に辰門意
氣の一誇として稱ふるなりき。固より技倆の向
上は當然の事に屬す。今や時なり。洛陽の地佳
美なりぬ。行く可し、行く可し。由來北方は強
なる者、健兒の活躍期し待つことを得(A生)

先輩通信

四高法科會

明治四十五年二月七日大學構内第一學生控所で
第二回四高法科會を開く、昨年は十一月であつ
た、四高出身の法科大學生間に何等統一の機關
なく會合なく従つて四高との連絡も無ければ卒
業された先輩には猶更ら連鎖は見出されぬ、嘗
つては金城に相携へて高歌した當年の士も一度
三十番室の漂たる一票に化すると共に路傍相會
ふも亦相知らずと云ふ有様を遺憾とし四高法科
會建設の議か起つた、恰も好し溝淵校長の上京
を迎へつゝ十二月初旬第一回を不敢飯田河岸
の富士見樓で聞いた、今度は實に二度めである、
四高に據つて以て皮相の文明に染まず、北辰の
光輝を仰いで高鳴る胸の血潮に唱ふた其の人々

が、變る旅路の一夜の催しに相集り相語る事既
に愉快である、更に先輩の來り會し快談湧くが
如きに於ておやである。

會は先つ三回の堀田君の開會の辭を以て初ま
る、池の縁の椎の葉蔭にうすら寒く星か眸いて
居る夜である、そをして窓の裡には八十余名の
四高出身者が暖かいストーブを相擁して語る者
がある聴く者があるやがて早川千吉郎氏が立た
れて、約二時間の長い演説をやられた、語られた
處は要するに青年訓である、次に野村教授が立
たれて之れも亦滔々と一時間余りも玉塵を飛さ
された、語られた處は法科大學生の未來であるが
興加はり氣揚ると共に或は政治論となり經濟論
となり或は社會問題に轉し政黨問題に飛ぶ、聴
く者は皆洵然として聴く、四高では禁酒令か布
かれてあつたが大學では構はないからである、
そをすると二上兵治氏が反對演説をやられた、

然し野村教授に對してははない、かゝる會合に
於いて長い演説は禁物であると云ふのである、
二時間も三時間も傾聽させられてはたまらない
と云ふのである、然し之れは又早川氏の盛んな
る反駁論が主張された、斯くして興は益々加は
つたが學生控所は十時に閉づるのが規定であ
る、茲に閉會を宣し四高萬歳を唱へて本郷通り
へ出た時には街燈の光りのみが淋し相に街に連
つて居た。

在四高の諸君、諸君と相會ふのも近きである、
四高法科會の一回と二回は云はれ最も盛に諸君
を迎へんが爲めの準備の會である、諸君が新來
の銳氣を擔ふて赤門をくぐるの時諸君の友は四
高法科會に集まつて熱誠以て諸君を迎へんとし
つゝある、語る可き事は多くある、聴く可き事
も亦より大ならん事を切望する。

當日來會の先輩は新年早々の事で余り多くは

無かつたか芳名を記さは左の如くである

(順序不同)

牛塚氏 永野氏 河合氏
奥山氏 加藤氏 早川氏
高木氏 佐々木氏 國分氏
森岡氏 二上氏 野村教授

(三月十一日成川武男記)

(前文畧す)

舊臘七月教室より派遣せられて東京電燈會社へ
實習に參り候電氣工學教室の常例は二年の課業
を一先つ終へて校外の會社若しくは製造工場へ
實地演習の爲七月より十一月まで四ヶ月間派出
せらるゝ事に定まり居り小生も去年十一月終り
まで帝都の方へ參り居り申候因に土木工學の古
谷晋君は朝鮮鴨綠江架橋工事の方へ參り申候
扱て實習とは何をする事かと申せは御承知の如
く主として新設工事等のある會社に依頼して機

械器具の据付設備若しくは配電設備等を自ら着手
してその工事を助け一方之か如何なる結果を來
すかを理論より論及する様に仕組まれ居り候勿
論行先の模様或はその人の都合等にて實習なる
者は決して一樣になし得らるゝ者に之なく千差
萬別にその結果を齎らし來る者に候又地方へ行
くと都會に到るとは自らその人の嗜好にもよる
事にて都會を好む人と地方を好む人と有之候さ
て愈行先定まりて或る電力若しくは電鐵會社等
へ到る時は暫くその會社の一員として働く事に
相成り候へは一種新らしき感じか起り申候何し
る多年學窓にのみ親しみ居りし者か一度社會の
表へ一寸交る事に候へは自分達には一種云ひ得
ぬ誇りと恐怖とにて胸を充たされ申候
然し數週乃至一ヶ月程働きて畧々周圍の狀態を
察すれば着々仕事も仕易くなり心のまゝに働さ
得る様に相成るべく候人によりて一部の設計据

付設備等の擔當を命せらる事あり或は單に手傳
位に留まる者も有之候主として地方の小なる會
社等へ參り候は、責任を以て仕事を任せられ申候
かゝる場合には自己の爲には大に研究になる事
多く有之候、初め來りし時は周圍の事情に暗く
して充分了解に苦しむ者に候第一發電所に參り
候も何か何やらさつぱり分らず只龍大なる器械
か居然として列をなせるを眺むるのみにてその
電機の接續法は如何になり居るかさへ一寸分ら
ず況んやその運轉狀態等に到りては數ヶ月の終
りに於て初めて窺知するを得る様な次第にて困
難を感じる事大に候故に常に前より注意して發
電所の如きは實習前一通り呑み込み置く方得策
に候小生も一昨年の夏季休暇を利用して少し發
電所まわりをなし置候ひしかは後日實習の時に
は大に利便を感じ申候茲に最も痛切に感ずる事
は學校には實驗などをするに之に適する立派な

る裝置等遺憾なく具はりて少しの不便をも感ぜ
ず候へ共若し或る山間に於ける水力發電所へ實
習に參りたりとせば種々の不便を感じ第一通信
するに電話の設備なく又少し試験的に或る測定
を行はんとしても學校に於ける如き完全なる者
ある事少なく寧ろ何もかゝる設備又は器具を備
へざる事多く例へば抵抗器の如きは教室には調
製し得る様になせる特種の物あれ共該發電所に
ては何等かゝる者なく先水槽に食鹽でも入れて
抵抗器の代りにする等の臨機の策を案出して有
り合ふ品物にて早く簡單になす事に着目すべき
如き事は屢起り申候實習にては別に學校にてひ
ねくる如き六ヶ敷理論などは殆んど遭遇する事
少なく候へ共上述の如きフアマミアなる然か
も一寸六ヶ敷實際問題か事々物々に起り來り大
に此の方面の練習に相成り候小生はつら／＼考
へる事の有之候すべて工學に於てはあまり小

き理論に執着して大局を忘る様な事ありては悪結果を來す事屢ありて随分その間には學問以外理論以外に難問題に逢着すべく却つて之等の事か六ヶ敷部分を占め居り例へは毎朝レギュラーリーに定刻に出勤すると云ふか如きは一つの大きなフアクターに之あり候それを往々用事なしとて欠席若しくは遅參等の事ありてはその會社の人々に對しても濟まぬ事にて一方自己のふまじめを表白するに等しく小生共も此点に就き常に先輩若しくは教授より忠告を受け申候つまらぬ知れ切つたる事を並へ申候へ共小生は大にその實事に遭遇して感したる事に候へは所感のまま申上候

今までの事より考へ候に電氣の方はどうしても數學が先きに立ち申候殊に交流理論等を學ぶ際に於て種々の微分方程式又は積分の如きは電氣のこの事實を解決せんか爲めに論議せられたるには非ざるかと思はるゝまで都合よく應用されたる者少なからず候小生の方は製圖は割合に機械若しくは土木工學より少く候へ共その代り實驗が非常に多く第一年にては電氣磁氣の物理的實驗にて電氣に多く關する者例へは抵抗測定(普通金屬線抵抗、絶縁抵抗等、起電力、電流、磁場の強さ(ソレノイト中の、又は地磁氣の水平分力等)磁氣ヒステリシス蓄電器の容量測定等之あり第二年にはいよいよ電氣工學の實驗と相成り面白く相成り候、先づ發電機電動機の特性を檢し蓄電池の充電放電、電燈の光力試験、更らに電動機の能率測定に進み候又交流に入りて誘變壓器、發電機の特性を檢し第三年に入りて誘

導電動機の能率及特性、高壓電流の試験、交流發電機の並列連轉、回轉變流機の特性を調査致候その實驗の結果はよく論議して報告書を提出する者に候

當大學の母校出身者も大分多く相成り心強く相成り候電氣の方は一寸流行とでも申さんか大變皆入學を希望致し昨年なども競争試験ある筈なりし由にて來學年はなほ増加するかと存候電氣を志望する人達は物理の電氣磁氣をよく調べ置く必要之あり候ぜ、ゼ、トムソンの電氣磁氣ダンカ、ゼラルトの電氣磁氣は宜しきかとも存候甚た支離滅裂の事のみつゝり合はせ候へ共久しく御不沙汰致し候へは一筆申上候

一月二十二日

秦 敏 夫

河合義文先生坐下

部 報

北陸學生聯合演說會

一月二十九日午後六時より至誠堂に於て開會。

一、開會の辭 堀 委員

各學校の賛成を得て多數辯士の來會を得たことを先づ感謝し自然と人生の接觸より來る北陸論壇の使命を述べ本會開催の主旨を開陳して降壇

一、奮闘的精神と國家 二中 瀬尾 健二君

國民として強き信念を基としたる努力の必要を説くこと極めて切、例をギリシャの滅亡せる原因にとり、ローマの之に代つて起れる原因にとり、

縦横論議する所首肯に當る節多く苦心の痕歴々として指點する可きに似たり。最後に國民の責任自覺を叫びたるなどもよき用意と云ふを

得可し。努めて止まざれば亦囑望するに足る。

一、吾人の責任

七尾 甘庶 義郎君

青年の責任を消極的と積極的とに分ちて述べ、消極的責任とは君の言に従へば我國の位置を現狀に維持して行くことなり。また積極的責任とは位置をより高き位置に高むることなり。論旨部分的には感心の出来ぬ節も可なりにあつた。

例へば武人の責任、商人の責任、文人の責任、宗教家の責任など責任にも種類多きが故に責任なるものゝ定義は定められずと云ひしが如きはこれなり。されど慎重なる態度と、眞面目なる言葉の使ひ方とは正しく當夜の尤もと云つても過賞であるまい。切に君の努力と健康とを祈る。

一、夢想者は世界の花

商業 大友 佐一君

希望を追ふて進む所に人間の進歩があり、歴史の展開と云ふ者がある。歴史は或る意味に於て希望の長き連鎖であらねばならん。殊に英雄

の生涯は爛々たる希望の光に依つて偉大なる光

耀を放つて居る者である。希望を奪つた英雄、英雄を奪つた歴史、其處には何の光もなく色もない。然し希望の上には尙一つの希望がある。其が幻想である。希望を更に更に深く追求して行くに遂に幻想と云ふ域に到達しなければならん。英雄は光の裏に陰影があるけれ共幻想に生きる者は光の裏にダークネスを持たない。そして人文の發達は常に此等の幻想より生れて来る。

一、醫學の本領

醫專 楠田理一郎君

人生の最も悲痛な出来事は病氣と老衰と死とである。醫者は此の問題の最も大切は當事者であつて、醫學の前には貧富もなく貴賤もない。其の進歩は實に國家社會の全面に向つて幸福と安全とを齎す者である。曾て天下の俊才悉く醫に走ると思へた人もあつたが此は甚しき誤と思ふ。人類發達の第一歩は醫學であつたと同時に

人類最終の幸福は醫學でなければならん。

一、渴仰

本校 中平 政雄君

君が眞摯の態度と熱誠なる辯舌は聽者をして自ら襟を正さしむ先づ宗教の人生に欠く可らざるを説き釋迦基督ソクラテース等の偉大なる靈の方を懐ひ又樽牛梁川などの確固たる信念の渴仰より來るを喝破し次いで學生に宗教の必要なるを云ひ渴仰は生命の源泉人生の慰安者なり願はくは愛と力との信仰に渴仰し人生に慰安を與へよと叫び退壇

一、時代精神と歴史教育

小松中 竹田義一君

先づ時代精神の定義を下し時代精神とは國民の元氣を興し之を向上發展せしむる根本精神なりとし而して此の時代精神は後代にも傳はり國民を指導する所以と實例とを我國の歴史につき一明細に示し之が偉大なる力を説き轉じて之を薰育するは歴史教育の任なるを數個の例を引き

證し吾人は歴史を學び死せる記號の記者たるをやめ活ける時代の精神指導者たるを期せよと結び。

一、一直線

一中 篠 原 雄君

山人は生と死との二点間の線にして此の二点線間を歩むに三種の方法あり第一は膝栗毛にてをあれば之を登り川あれば之を涉り複雑なる曲然を描き人生を渡る物にして所謂凡人は此の法皆とる第二は汽車旅行にて山を突き川を越へ自其を制し能く人生の紛雜を解く世の英雄豪傑はる此の旅行をなす者なり第三は空中旅行にして家の行くや山もなく川もなく平々坦々其の欲す類がまゝにて其の行程や一直線なり宗教家思想じ學者等は此の種の旅行家にして彼等は實に人をの最も敬慕すべき者なりと説き更に話頭を轉て我國學閥を罵倒して學界のため萬丈の氣焔吐く所意氣甚だ壯正に是當日第一の雄辯なり

一、閉會の辭 新木 委員

世界史の第一頁は北方種族の南方經畧を以て始つて居る。沈痛なる北方の風氣は自ら人に内省的の傾向を與へなければならぬ。潜める力、動かんとする心、此等は期せずして其處に生ずる。北陸の地は我が國の辟寒である。其處の青年には潜める力がなければならぬ、動かんとする心がなければならぬ。

の基督抹殺論を持ち出し、或は南州の修養談を云ふ。説く所統一無きが如くして而かも一貫せる精神は火の如く輝けり。君を譬へて四高演壇の彗星となさんか。

野心論

福永 園松君

君は嘗て寄宿舎大茶話會の折囂々たる罵聲裡毅然として所信を吐露したるの故を以て遍くその英名を知られたるの士、吾人の君に期待する所の大なりしは云はずもがな。君壇に立つや、先づ目的と野心との區別を明にし、吾人は遠大なる野心を追求してこそ始めて偉大なる事業を成すことを得、人或は現代青年に望むに意志力の養生を以てし思索力の修養を以てす、何ぞ思はざるの甚だじきや、意志力や思索力やそれ自身何等の意味を有せるに非ず、用ゐらるゝに於て始めて意味を生ずるなり、現代青年必ずしも意志に乏しとせず、思索力なきに非ず、たゞこ

第三回演說會

二月二十四日、午後六時と云ふに開かれた。聴衆も割合に多かつた。例に依つて演說の概要と短評とを書いて見る。

身の爲め

加内 三郎君

君の感想を述べたものと云ふても宜からう。時に蛙の旅行の話为例に引いて人間行爲の淺薄なることを罵倒し、時に樗牛の日連論を訂正して念佛無間禪天魔云々の眞意義を示し、或は秋水

養生を以てし思索力の修養を以てす、何ぞ思はざるの甚だじきや、意志力や思索力やそれ自身何等の意味を有せるに非ず、用ゐらるゝに於て始めて意味を生ずるなり、現代青年必ずしも意志に乏しとせず、思索力なきに非ず、たゞこ

れを用ゆる野心なきが故に、偶々表れざるに過ぎざるのみ。されば試みに彼等をして遠大なる野心を追求せしめよ、意志力や思索力や自らこれに附隨し來らんと云ひ、無類なる拙辯より起ちて古今獨歩の積を得たるデモステネスの雄辯は彼がカリストタラスたらんとの野心に基き、奈翁が回天動地の偉業もたゞ一ヶ彼が野心の満足されしに過ぎざるを見思ひ半に過ぎんなり。と實例を以て論據を固め、更に野心の種類を擧げたり、曰く下なる者を私の野心、中なるものを公衆のための野心、上なるものを造化の妙諦を味得せんとする野心、とすと。論旨には大体に於て肯かる、聲調未だしと云はざるを得ず。

なく物足らぬ心地せり。然しその論旨の大なる結構の壯なるは多とするに足ると思つた。君は開關の始めより説き起して日本民族の使命を明にした、その使命と云ふのは世界統一のことである、此使命を果さんとするのが乃ち國民の覺悟であると云ふのだ、而してこれを果さんには五條の御誓文を守らなければならぬと云ふ、至極穩にして健なる説、態度は今少し落つてきて貫ひたし。

擧げたり、曰く下なる者を私の野心、中なるものを公衆のための野心、上なるものを造化の妙諦を味得せんとする野心、とすと。論旨には大体に於て肯かる、聲調未だしと云はざるを得ず。

自己告白である。生、死と云ふものに對する若き人の感想である。ケーザルの例も引かれた、不

縦山 眞君

大和民族の覺悟

前坂重太郎君

君は奇行を以て四高に鳴り、また音楽家としても盛名を擅にす。吾人ひそかに君が得意の音楽論の出でんことを豫想せしが遂に出でず、何と

君十一歳の時最愛の祖母君が逝去せられた時の光景を述べた段であつた。靜かに聞えて居つたら誰でもほろりとしたであろう。君最後に曰はく人生の大部は死の恐怖、愛慕の嘆き、功名の輝

き、であるがその間に介在して永遠より永遠に連る自己の姿を明瞭に見れば文明も何も凡て空である。と、こんな感想の閃くこともあるがそれは語の示す如くほんの瞬間である、願くは偉人出で、吾を救へ、終り！

人の力

中田 秀夫君

君の演説は高遠なる理を卑近なる例に、滑稽の中自ら大なる真面目を含有すると云ふ点に於てまた四高の珍とするに足るものがある。今日の演説にもよく君の長所が顯はれて居る。劈頭に

於て君は、蟻より人を見たらは何と云ふであらう。己等十疋もして漸く運び行く飯粒を人は池の様な大きな茶碗に何百も一度に入れて少きも二碗多ければ七八十碗も食ふ、その食ふや電柱の如き箸を自由自在上下四方八方に振り廻はす

のである。云々と云ふて人の力の偉大なことを比較で示して居る。そして次へ来るとその人間

が人間同士で戦争をする、勝つた奴が横行する、然しこれが祝福される可き事象であらうかと自問して、さて、否と自答して居る。更に次へ来るとこれ以上の戦がある云ふ、それは精神界の戦であると云ふ。そしてこの戦に勝つのが真に祝福される可き勝利であると云ふ。それには人格が必要であるから、青年たるものは宜しく人格なる利剣を研いで此戦に勝を制す可きであると云ふ。

目的なき修養

津山 玄道君

自己告白より論は進む、倫理萬能、理想實現の叫びは過渡期に於てなされる、也、道徳の軌道を理想に向つて進まざる可からずと、道學者は云ふ、されど古今の偉人誰ありて理想を實現し得しぞ吾等善をなさんと欲すこれ既に偽善なり、當時

吾善なりと信したりし行爲も、後より之を見れば多大なる不純分子の混するありて冷汗淋漓として背腋に傳ふを覺ゆるなり、云々と肺肝より出でたる君の言語の眞面目さには誰れしも動かされたことであらう。更に知行一致難を説く。余は間食の害あるを知る、知ると雖もよくこれを絶つ能はざるなり。慈善の善行なるを知る、知ると雖も尙見逃すこと多々なり。と、誰かこの言を笑ひ得るぞ。君は更に進んで世の慈善家の信す可からざるを云ひ、例外として小野太三郎氏の篤志を稱擧したり。君、最後に曰はく、善行はその原因を見るを得るも目的をたつることを得ず、となし目的をたてたる修養は遂に偽善、虚飾をまぬかれずと叫べり。

原因の一つに數ふればなり、されど君の意は恐らく動機の不能と云ふにあらんか、然らば吾人もまた異議なし。

現代文學に描かれたる青年 岩城 教授

最近の文學界で青年の間に勢力ある享樂主義の文學に描き出された青年の特質を擧げて之を江戸文學に描かれた青年に比較し、其の氣風の偏に感覺の細微にのみ傾いて思想の貧弱淺薄を招いて居る点を指摘せられた。これは先生に願つて本欄へ出して頂いたから詳細は其の方で見ても可い。

所感

川崎法學士

余、昨年六七月の頃滿州西比利亞に旅行を試みたり、欲する所は主に實業の視察にありしため、其他の事項に關しては十分なる研究も出來ず從て余り多くの所感を有せずと雖も眼に觸れ耳にきこれなり、吾人は通常目的をたつることをも

入りしものは自ら頭腦の中に印象となりて残り

つ。今、諸君の前に開陳するものは實にその断片の二三に外ならざるなり。

一、露國が國力の發展上殖民地に重きを置くこと。

余は船より捕鹽に着きぬ、浦鹽は全く歐風の市街なり、その善美を盡せることは豫想の外にありき。これより汽車の便をかりてハポロスクに行く、草莽萬里の間を蜿の如くねり行く汽車の窓より見ゆるものは大森林、大牧場、その他小の殖民地、特にその殖民地を見れば露國が如何に殖民に腐心せるかを察し得可し、露國の殖民政策は日露戦争後に至りて殊に政府の意を致す所となり、戦前に於ては年々二十萬の殖民を送り居りしが四十年には五十萬、四十一年には七十萬の多數に上り、費用の如きも四十二年には參千萬圓を算するに至りぬ、これ彼が東方の勢力を収めんとするの野心に出でたるにあらずし

て何ぞや、佛のある財政學者は嘗て殖民地を尤も多く有せる國は最強なる國なり、少くとも將來に於て最強なる國となる可しと云ひ又、偉大なる國民はよく殖民すと云ひぬ。宜なる哉、列強競ひて殖民政策に意を致すことや。然らば殖民は國家に對して如何なる關係を有するか、これには政治上の理由と經濟上の理由とあり、領土の擴張は前者の場合にして、人口過剰の救済生産物の量と種類との増加などは後者の場合なり、殊に領土擴張は國力消長の上に多大なる影響を有し、直接陸海軍の根據地を興ふるのみならず、又民族の増加に與つて大なる力あり。されば今日の戦争は主に殖民地のためのものにして、近くは日清の役などもその一に算ふ可きなり、露國が寒瘦得るなき西比利亞にまでかゝる甚大なる勞を致すを見ても、如何に殖民の必要なるかを知るに足らん。翻つて我國の現状を思

ふに、人口は年々七十萬の増加を示せり、而も遂に未だ一つの云ふ可き殖民地あるを聞かず

内地にありてこそ氣もつかざれ、かゝる光景を目撃しては誰かこの感を深からしめざらんや。

汽車中三日にしてハポロスクに入る、ハポロスクは黒龍江と松花江との出會点にあり、砂漠の如く茫茫たる大原野を通りてこゝにこの大都會を見る、余は市中なるアモロスキーの銅像の下に立ちて彼が成業の跡を想ひ無量の感慨にうたれたり。次に感したことは

二、露の企圖の遠大なること、

ハポロスクを見てもその規模の大なるに驚かると同時に如何に露國の企圖の遠大なるかを窺ひ知り得るなり、ハルピンを見ても亦然り、朔北の野にしてかゝる大都會のあらんこと、内地人の中々夢想し得ざる所なる可し。

又東清鐵道の如きはたゞに經濟上に用ゐらるゝ

のみならず政治上にも大なる意味を有せるなり彼露國は決して政治上には使用せずと聲言し居れども事實上今迄使用し來れるものなれば此後と雖も保證されたものに非ず。

露國今日迄の侵畧史を案するに一度企圖せることは飽くまでも貫徹せざればと云ふ執著あり、而かもその企圖たるや遠く且つ大、眞に範とするに堪へたり。右語に曰く始あるもの多く終あるもの鮮しと、余が學生時代の追懷に於て尤も慚愧に堪へざるはこの点なり。世の中へ出ても頭を悩す如き問題は少きものなり大概は常識の判斷にて事足る、たゞ難しとするは始終を貫徹したる實行なり。然しこれも習慣となれば左程困難なことにも非ず要は習慣を作るにあり。これ學生時代の修養に待つの外なし。次に感したることは

三、實力の養成と云ふこと

旅順口の戦迹を見る、難攻不落と云はれた金城へり。學生時代に於て實力を養ふことは最も大切なる鐵壁の要塞は實に是であつたかと思はれたり。日清の役に於て一度我有に歸したりしをかの三國の干渉に依つて無念の涙を吞みつゝ還附したりしは誰しもの記憶に存する所なる可し、今又これを占むる、死せし愛子の蘇生せるが如き感あるなり、これ偏に實力の結果に非ずや。個人間に於てこそ裁判所もあり、法律もあれば各々權利を主張し得可きも、國際間に於ては只實力あるのみ、否余の見を以てすれば個人間に於ても實力のあるものが勝を制する也。例を學生にとらんか、卒業は即ち世間へ出る第一歩なり、スタートなり。その足先に差あらんや、只走るに及んで實力の競争となり、あるものは倒れ、あるものはつまづき、あるものは埒外に飛び出して實力の勝れるもの、勝利となる。孔子すらも己に如かざるものを友とすこと勿れと云ひ給へり。以上は空行く白雪も停り、梁上の塵も自ら動く。薔薇の香空に薫する南歐の古都を訪ふ旅人の一夜燈火眩きカフェにジプシーの奏で来るギター

金毛の獅子も踞肆せざれば未だし、願くは諸君もこの例話を體得して後日の大成を期されよ(文責記者にあり)

以上閉會したのは十一時。閉會の辭として新木君は呪はれたる四高を嘆じた、余の聞いた君の演説中で同化論と共に最も秀たものだと思つた、聽者は相共に深き興味と用意とを以て傾聴した、終りに當つて辯士諸君の健康を祈り、岩城先生、川崎事務官には皆に代つて深き感謝の意をさぐぐ。(井上功記)

音楽部報

昔者師曠琴をとりて清角を鼓す。「一度之れを奏すれば玄雲あり西北方より起り、再び之れを奏する時、大風至り之れに隨ひ帷幕を裂き俎豆を破り廓瓦を墮としぬ。」音律の美妙なる振顛に感

じては空行く白雪も停り、梁上の塵も自ら動く。薔薇の香空に薫する南歐の古都を訪ふ旅人の一夜燈火眩きカフェにジプシーの奏で来るギターの節廻しに思はずも胸打たれ。ラインの流れ静けき時巖頭に立つて歌ふローレライに幾多の舟夫は舟も身も忘れたと言ふ此等の事はそも何を示してゐるのだらう。「音楽は人心に於けるエスペラントなり」と誰れかが言つた。「人心の根本或は人心の外界天然と融會するその合一の實體を表はす音楽は藝術の中心にして萬有の直現なり」とも言はれてゐるのも蓋し其邊の消息である。

若し音楽的メロデーに感じない様な人があたら其人は生きては居れまい。生きてゐるとしても決して完全な人間でないと云ひ得る。我が音楽部もこの意味に於て重大なる責任を持つてゐるのだ。而して吾人も其責任を感じて努

力してゐる。

其の努力の一つとして我部は新に冬期休暇を利用して十二月二十四日から三十日まで一週間、音楽練習會を開いた。

會場は本館の音楽室を以て之れに充て、午前九時から樂典の講義と聲樂の練習をした。樂典の講義は音楽基礎樂譜論から音程論音階論まで、

前坂委員が受持たれた「僕不肖勿論不完全だが大凡樂譜を見て解し得る迄の程度まではやつたつもりだ」と言つて居られた通り短時日なるにも拘らず豫想以上の効果を收めた事を思ふ。

聲樂は大西先生に御願した、御多忙中にも拘らず毎日熱心に御教授下さつた。練習した歌曲は、新年、御國の民、ヒユッタライン、廣瀬中佐、蝶の舞、ウオンダリング、等である。

吾等は大西先生と前坂君の御盡力に對して感謝すると共に毎日出席せられた部員諸君の熱心を

喜んで居る。

第五回音楽部大會

例の如く至誠堂で第五回の大會を開いた、二月十七日、雲が降り風の激しく荒れる晩だつた。華やかな電燈がともり會衆が七分通り場に満ちた頃初まつた。演奏曲目を示すと

第一部

- 1. Kimigayo. 部 員
- 2. Chorus. 部 員
- 3. Harmonica Solo. 沖 田 君
- 4. Organ Solo. Mr. Speight
- 5. Solo (vocal) (schlummerlied) 前 坂 君
- 6. Violin Solo. (Freyshütz) 大 橋 君
- 7. Tenor Solo. 山 室 氏
- 8. Solo. Mrs. Wilkinson.
- 9. Piano Solo. (Eastern melody and figure) Mr. speight.

- 10. Violin. (安南王の行列) 部 員
- 番外 薩摩琵琶(本能寺) 松 見 君
- 第二部

- 1. Violin duet. (from Mazas)
- 2. Duet. (How can I leave thee; by Kücken) 部 員
- 3. Harmonica. 部 員
- 4. Organ Solo. (Love and fower; by aldrieh) 前 坂 君
- 5. Violin Solo. (Last Rose of summer) 池 森 氏
- 6. Solo. Mrs. Wilkinson.
- 7. Organ Solo. (moonlight sonata) Mr. Speight.
- 8. Violin. (Travatore; by verdi) 部 員

- 番外 越後獅子 部 員

第一部大橋君のバイオリン獨奏は同君が本校に

以上

於ける最後の演奏として心血を注いだものだけあつて満堂を酔はさずには居らなかつた、やるせない、ため息を洩らす若い人の胸の様なメロデーの美しさ! やさしい絃のふるえ! 急激の様な拍手は暫し止みさうにもなかつた、此時場は最早立錐の余地もなかつた、沖田君のハモニカ獨奏はあの簡単な樂器から出てくるメロデーの様がしなかつた丁度軍樂隊の奏して居るのを聞いてゐる氣がした。

松見君の薩摩琵琶は當日の呼物だつた本能寺の一曲今も耳に残つて居る。第二部の前坂北條兩君の合唱はベースが負けた、村田君に得意のベースをやらせたかつた。

當夜は前坂君が非常に苦心したにも拘らず聲樂は甚だ振はなかつた蓋し當日になつて出演を拒んだ連中が多かつた爲である。

又ヴァイオリンの方も大に盡力したが部員とし

ては唯だ四人で且つ練習が足らなかつたので思ふ様に行かなかつた。吾輩等は共に大に其責を受けなければならぬと思つて居る。

我音楽部の爲めに特に出演せられたるウイルクンソン夫人の獨唱は非常に好評を博したと同時に吾人は大なる教を享けたと思ふ。斯界の名手スベイト先生の演奏は評し得ない。

最後にスベイト先生ウイルクンソン夫人ハウキ嬢及び山室池森兩氏に謹んで感謝の意を表す。(M.S. I.M兩生)

劍道部報

劍道大會

羽翼を西に伸はすことを得ざりし我部は此處に曙光新たなる睦月寒稽古を開始し押へて發せざりし威力を残りなく此處に發揮し風吹きすぶる晨、霞飛び、鷺毛舞ふ夕、二百有餘好劍の士

が矢叫ひの聲は百條の梁木に反響を起して至誠超然の叫びと共鳴の聲を成せり。

三句の練磨に鍛へ得たる五尺の軀幹に蓄積し得たる力を外に試みざる可らず。乃ち二月十八日を期して劍道大會を開催す。

當日の勝負は左に録す。

- ○ (山田) 了然
- ○ (安藤) 康彦
- × (久保) 恭平
- × (秋月) 周二
- × (菅野) 新八
- ○ (尾崎) 幸三郎
- ○ (細川) 榮次郎
- ○ (小坂) 義雄
- ○ (鱒淵) 源
- × (岩田) 四郎
- ○ (山田) 憲
- ○ (長野) 歳重
- ○ (佐倉) 鐵太郎
- ○ (鈴木) 福男
- × (眞野) 九一郎
- ○ (小澤)
- ○ (石坂) 善三
- ○ (北川) 榮一
- ○ (松山) 高四郎
- ○ (鹽谷) 知夫
- ○ (東) 精太郎
- ○ (萩原) 正
- ○ (日高) 豊一
- ○ (大工) 原喜三郎
- ○ (岩佐) 剛
- ○ (遠藤) 終之助
- ○ (田村) 彦三郎
- ○ (高田) 楠雄
- ○ (松井) 義雄

○ ○ (藤江) 孝

○ ○ (馬場) 博

○ ○ (鈴木) 敬二

○ ○ (津山) 玄道

○ ○ (高橋) 賢二

○ ○ (北條) 敬太郎

○ ○ (伊良原) 國市

○ ○ (林) 德

○ ○ (丸瀬) 正恭

○ ○ (稻葉) 龍三郎

○ ○ (高森) 卯太郎

○ ○ (柳川) 新吉

○ ○ (伊藤) 久治

○ ○ (田島) 幸雄

○ ○ (三上)

○ ○ (眞野) 九一郎

○ ○ (小原) 信夫

○ ○ (廣野) 寛

○ ○ (大崎) 大禪

○ ○ (北條) 敬太郎

○ ○ (牧野) 利家

○ ○ (近藤) 謙三

○ ○ (小野) 鈔多

○ ○ (大橋) 謙三

○ ○ (大谷) 督勵

○ ○ (長曾) 我部東城

○ ○ (引地) 興五郎

○ ○ (石川) 一佐久

○ ○ (南) 三九郎

○ ○ (鳥居) 武雄

○ ○ (神岡) 義男

○ ○ (高森) 卯太郎

○ ○ (饗庭) 光古

○ ○ (大橋) 謙三

○ ○ (猪股)

○ ○ (杉立) 哲吉

○ ○ (田淵) 敬治

○ ○ (椰野) 巖

○ ○ (廣野) 寛

○ ○ (五香) 屋

○ ○ (北川) 榮一

○ ○ (佐藤) 三千三郎

○ ○ (鳥居) 武雄

○ ○ (藤井) 繁

以上四十組の仕合終りて時に午点されは午前
の仕合は此處に閉したり、午前中は校内試合に
て何れも元氣の溢るゝまゝ勇の發するまゝ兩雄
相闘ひければ見物人は知らず拳より汗のしたゝ
るを覺えたり、就中岩田、山田の仕合は、さすが
に廣き無聲堂も狭き迄に追ひつ追はれつ眞に昔
の一騎討も斯くやと思はれつ。

午後一時再び午後の大會を始めぬ。

寒稽古皆勤者報告

出席者百〇四名 皆勤者七十五名 稽古

本數九千二百〇六本

進級者報告及證書授與

武徳流之形 (稻葉) 一也

(山田) 卓爾

兩雄立上り面に朱を注ぎ互にエートと打合
ふ掛聲さすか堅固の無聲堂も共鳴りして震動す

るを覺えぬ、勇、壯、快。

○工(波佐谷龍華)

○近藤 時司

敵は体堅固に吾れは小なり何れと見る間に互に打合敵は面を吾は胴を取りて勝負となり敵の虚に打入り遂に横面を切落して勝は吾れに歸したり。

○小中(二羽 英一)

○池原 啓三

共に似たり寄りたりの体撃戟の音しばし絶えざる中に吾れは屈強の十人力太刀を使ふ事棒の如く彼れも能く戦ひしか遂に軍扇吾れに舉れり。

○商(田上善太郎)

○六人部克己

彼れは小手の名人、吾れは横面互に切りつ切られつしたりしか哀れや彼れは横面二本切られて倒れたり。

○工(室谷秀次郎)

○相蘇 保

彼れは大に吾れは小なり彼れ吾れを侮りてか直ちに二本取られて倒れたり。

○監(谷喜太次郎)

○能村幸次郎

彼れも屈強吾れも去るものしばし勝負も見えわかず、イヤ、ウムと力を盡して戦ひしか敵虚を打ちて功妙敵に得られたり。

○武(高桑 為茂)

○飯島 義寛

敵胴を攻むれば吾れは面を襲ひ何れも進撃に出たりしか遂に吾れ面二つを得て敵を倒したり。

○二中(木村 幹)

○辻岡 質

互に計を運らし勇戦奮闘見る者は知らず肩を聳かしたれと吾れもさるもの胴を真二つに切り返す太刀にて面を打ち敵をして我軍門に降

らしめぬ。

○商(松平 長康)

○宮内 直吉

宮本武藏の裔を受け鍛ひし非凡の兩刀に敵の膽を寒からしめ難なく二本を取り大小を提げ歸陣せり。

○小中(安惠 宗純)

○千家 鐵磨

吾れ大なりと雖彼れは猶大なり彼れも打てば吾れも打ち電光石火散亂し何れ雌雄とも見えわかさりしか敵の打入る太刀を受け損して遂に小手を切られて功を敵に譲りたり。

○二中(谷井 隼人)

○稻本 龍介

彼れは大に吾れは小然れども太刀の早き事はしばし敵を追込みしか如何にせしか吾れに得意の技も出ずして遂に敵に勝たれたり。

○二中(久保田 互)

○宗接 鶴榮

○工(都賀田勇馬)

○山本 與吉

彼れは商業の驍將吾れは非凡の四國一の旗頭何れ劣らぬ屈指の將見るも勇しき扮装振イヤオ一諸共打立つれば敵虚を打たれて一本得られ吾勝ちを急きし餘り反つて敵に攻め立てられ遂に敵に破られたり。

○監(高村 金春)

○相蘇 保

技伯仲にある兩雄互に攻めつ守りつ雌雄はし付かざりしが吾れ猛進して攻め立つれば敵防ぎ兼ねて遂に吾太刀に掛りて倒れたり。

○工(都賀田勇馬)

○山本 與吉

兩雄必死となりて戦ひしか吾早業何時しか敵を壓して敵は吾功妙を上る器となりぬ。

○武(山下 一美 近藤 時司)

彼れ体肥滿吾れは小、孤軍奮闘せし甲斐もなく面二つ切られて遂に吾れは敵の刀先に倒れたり。

一中(中 島 清 飯島 義寛)

吾猛虎の勢に彼れ氣を吞まれけん彼徒らに吾勝ちを得る器となりぬ。

一中(森田 商一 高田 昇)

身丈け秀れし兩雄互に力を込めて戦ひしが高田の妙計功を奏し遂に彼れを倒し意氣揚々歸陣せり。

× 〇醫(吉田 一郎 宮崎 孝三)

吾れ病後の小軀を以て敵に當る敵もひるます

吾れに當る神術妙計を以て攻めつ襲ひつ一負一勝、敵吾小軀に乗して攻立つれば吾れ背水の陣を布きて防きたり勝負何れとも付かざりければ互に休戦して引上げぬ。

〇師(掛村 定 辻岡 質)

吾れ敵を倒して功を擧げんと勝を急きしかは敵に謀られて勝を敵に譲りたり。

〇師(森田仁三郎 福島藤次郎)

兩雄の會戦は三度目なれば敵も今度の戦には死を決して會稽の恥を雪かんと攻め來れば吾も豪の者身を翻して横面を打ち敵屈せず來れば小手を切りて右足を擧げ難なく敵を屠りたり。

〇醫(福田 稔郎 高橋 良策)

黒絲絨の扮装は是れを名にし負ふ吾勇勃將軍

敵に向つて立上り飛込み様に胴を打ち反身になりて引上げ亦敵打入るを流して胴を打ち二つ胴を打切りたり反身になるもむへなる哉。

無(安田金三郎 山田 卓爾)

名にし負ふ山田將軍敵を白眼見て立上り胴二つ重ね切りて意氣揚々たり「鎧の袖の一ふれに及向ふ敵の影もなし」。

〇醫(佐々木文三 稻葉 一也)

一揉二揉互に離るゝと見れば太刀は何時しか敵の面を切り打合ひく戦ふ中妙術の胴の斜切り哀れ敵は敗陣せり狸將の妙術驚くに絶えたり。

〇師(山本富久雄 高田 昇)

吾打下しに哀れ敵防くを忘れて面二つに切られ次で打込太刀に胴を切られて敵は倒れぬ。

彼れは片手の軍刀術刀を廻して左に右に切倒さんと飛來れば小軀の吾れは巧に避けて遂に二本を得て名をなしぬ。

× 〇騎九(吉田 謙二 宗接 鶴榮)

是れも軍刀術の名手さすかに片手打の名人なり吾れ敵に衝き入りて胴を打ては彼れ逆に吾胴を打來りて共に倒る事數回吾れ敵の透を見て胴を取れば彼れ亦逆に胴を切り互に一勝一負雌雄決せず引合となりぬ。

〇無(平 井 壽 金本 萬吉)

彼れは無雙の士我れは四天王互に組合つて不足なし共に龍虎の如く戦ひしか敵に天利地利人和のあらざりし爲か勇士遂に討たれて吾に意氣揚々さする具となりぬ。

○醫(北野 榮三
○小坂嘉一郎

いさ敵ござんなれど四天王小坂氏決死となりて猛進し敵の虚を討ちて是れを倒し續いて連發二本取り天晴吾四天王よなど見る物の肩を廣くせしめぬ

步七(長谷川 信
○高橋 良策

吾れ勝ちほこりて彼れに當れば彼れ亦勇を鼓して立向ひ互に奮闘十數に互り勝負何れとも見えわかず勇勃將軍元氣を出し胴々と連鎖打ちすればさすがに彼れも防ぎ兼ね胴二本打たれて桂の冠を吾れに與へぬ。

○小中(今村嘉吉郎
福島藤次郎

彼れ小軀吾れは大、今日の花とも稱す可きは此戦なり我れもさるものながら彼れも勇名を轟し一世に隠れなき小中の驍將得意の術は小

手、胴、面の三方攻吾が得意は太刀を自在に使ふ事にして手數八本もあるか如く鎗將軍の名ある程なれば各得意の術を出して攻めつ襲ひつ難兄難弟時や來れりと彼れ三方より攻め立つれば吾れ神術を以て防ぎしも遂に受け損して体崩れ面を切られて敵に勝たれたり。

○醫(増田 悦
○千家 鐵鷹

吾黒金將軍功を立つるは此時と前より勇氣百倍して無二無三に敵を衝き何時しか二本取りて軍扇は高く將軍か馬頭に輝き居りぬ。

○一中(森田 豪
○持田鐵之助

彼れ強しと雖も吾れ亦鐵腕敏捷を以て名ある將なれば面、胴二本切り落して鐵腕將軍の譽を倍々挙げたり。

○一中(岩本 常吉
小坂嘉一郎

彼れ一中軍の大將として名聲天下に轟けり吾れは体細けれども信濃勢の旗頭なり互に打入り攻め合へは敵は辛くも逃げくして已に危く見えたりしか彼れもさるもの此所ぞ大事の一刻と勇氣を出して逆襲すれば其逆襲に功を奏し最後の勝ちは彼れに歸したり。

× 步七(蓮花 豊
○稻葉 一也

見えたりされば吾れは此所ぞさかさず打込めは我太刀に面、小手切られて倒れたり。

○小松(岩地 外松
○持田鐵之助

彼れ岩地將軍小松に其人ありと知られし勇士。手指の傷も未だ癒えざるに強敵鐵敏將軍と打ち向ひ勇戦奮闘場合掛引管見共に優劣なく見えたり然れども運や悪かりけん負は取りたれ雖將來雄飛す可き兆見えて少なからず吾れを驚かしたり鳳雛兒夫れ自重せよ。

○醫(北村清太郎
○山田 卓爾

彼れは醫專の御大將さすがに輕卒ならず大に自重して戦ひしか如何にしけん体に疲勞の様

出換りく打向ふ敵を能く五人續けて切落したる君が功天晴れ立派に勝たる哉。

右終りて部長閉會を宣す時に五時、朝よりの微雨は何時しかやみて暮色蒼然將に迫らんとす、堂内電光燦爛として今日の光榮を祝ふに似たる

時龍虎の争戦は何時しか去りて無聲堂々裡聞として復一聲もなし(金子要人)

柔道部報

六花霏々として降り出し遠山に銀鶴集り老樹に玉龍蟠るこれ冬季北國の景か世人炬燵を圍んで空談に耽る夕の數時間を利用して例年寒稽古をなし來りたる我が部今年々々變遷につれて今年

と共に志士各稽古衣を肩に校門を出つれば日將に東天に輝き北方に鬱積せる幾層の雲の底に寒月尙ほ冷かなる微光を殘し醫王の三峯遠く峨々たる水晶玲瓏たるは亦所謂花々公子輩の味ふべからざる所終に關門を通過したる者八十之れを本年寒稽古皆勤者となす寒稽古中淺水成吉郎氏初段に昇進せられ亦寒稽古終ると共に進級の沙汰あり左の如し

は冬の短日太陽尙ほ現はれず人皆温夢に酔ひ世尙ほ寂として音なき午前五時と云ふに床を蹴たて、無聲堂に集り來る者將百たらむとす以後二旬餘る數日或は路雪を見すと雖ども寒風身を切る如く橋上音なす迄に霜柱を現し或は路上六花尺餘に至りて人跡なく雪膝を没するは何の過言かこれあらむ琴々疊を蹴て無聲堂裡俄然化して龍鬪虎驤の活劇場となるや數時時針七時を指す

以上一級

荒井 嘉一 佐藤友一郎 北 俊一

北岡 滿直 土田與三郎

以上三級

高辻 眞 竹内 孝 北川 榮一

大築勘治郎 田原 喜嗣 山根 禮

土肥 善三 沖田瀧次郎 今泉 政雄

平尾 義文 武部 弘成 藤田 悟

大將初段金子源一郎 大將初段淺水成吉郎 副將津山 玄道 副將近藤 可哉 川上 實男 長野 歲重 兒玉 勇 小原 信夫 北岡 滿直 仁科 竹雄 佐藤友一郎 住吉 四郎 北 俊一 牧野 利家 杉坂富之助 田村彦三郎 御室佐太郎 土田與三郎 橋爪 庸藏 中村 勸 土肥 善三 平澤 平吉 大瀧計治郎 大築勘治郎 新莊 義人 山根 禮 平尾 義文 北川 榮一 阿蘇 良造 今泉 政雄 沖田瀧次郎 加藤 新吉 竹内 孝 武部 弘成

加藤 新吉 大谷 泰廣 竹蓋千代三

岩田 三叟 池田友五郎 小野 淡路

以上四級

岩佐 剛 伊良原國市 鳥居 誠

磯田 謙雄 今村 眞彦

以上五級

海老名敬親 長尾文次郎 渡邊 義道

松井 宗一 安藤 安孝 谷口 二郎

宮本 宗吉 丹羽 信夫 伊奈 靖

永井 三郎 柳川 新吉 奥村 尙輔

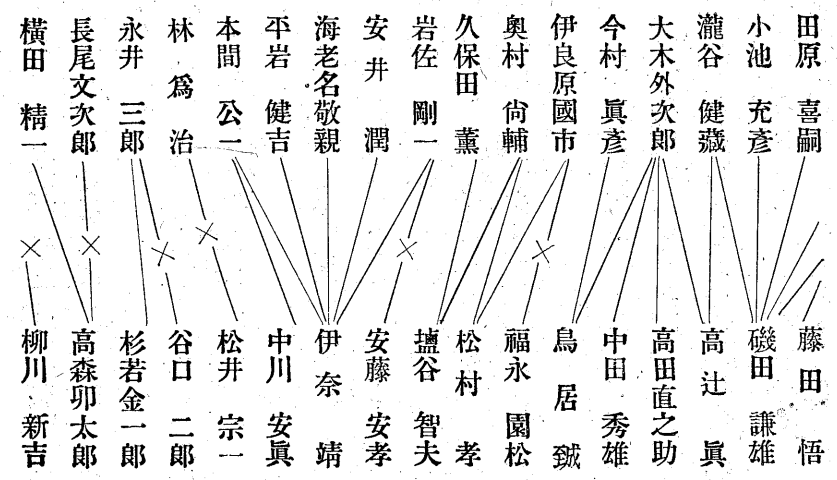
林 爲治 安井 潤 久保田 薫

以上六級

小雨降る二月十一日紀元の佳節を期して例年の如く我が部第十八回大會行はる式終ると共に午前九時無聲堂裡修羅場を現す七十余名の寒稽古皆勤者紅白勝負始まる

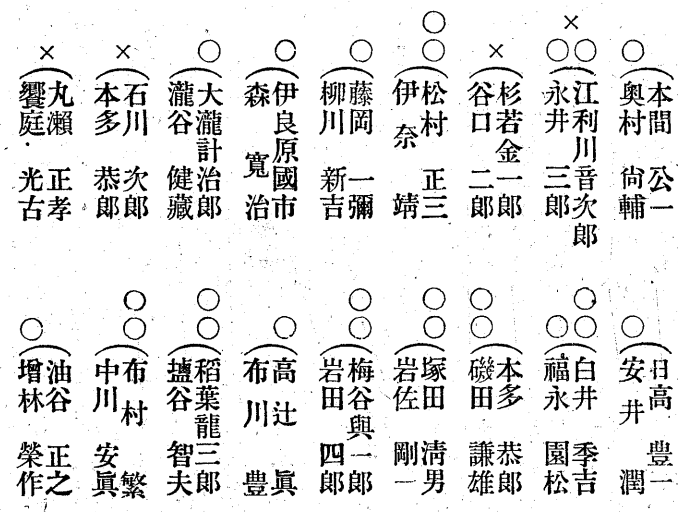
紅軍

白軍



丹羽 信夫
宮本 宗吉

兩軍勝負終に決せず引分く終つて三本勝負に移る



右三十五組を以て校内三本勝負終る番組の順序により寒稽古皆勤者並びに進級者に證書授與次に藤森師範寄附の紅白勝負の賞品授與終つて直ちに形にうつる

- (平岩 健吉)
- (小原 靖)
- (大木外次郎)
- (加藤 新吉)
- (阿蘇 良造)
- (田原 喜嗣)
- (藤田 悟)
- (平尾 義文)
- (新莊 義人)
- (竹村 弦)
- (松本 立也)
- (鳥居 誠)
- (竹内 孝)
- (沖田瀧次郎)

右終つて愈來賓選手三本勝負となる

- (林 善三)
- (土肥 善三)
- (小竹 榮治)
- (北川 榮一)
- (篠田 秋作)
- (平澤 平吉)
- (佐々木重太郎)
- (山田 卓二)
- (高間 規一)
- (清水 義雄)
- (川崎 思郎)
- (岩田 三叟)
- (木下 弘)
- (清水 良策)
- (小村恒次郎)
- (今村 真彦)
- (久田 一榮)
- (田村彦三郎)
- (加藤 正章)
- (仁科 竹雄)
- (林 善三)
- (土田與三郎)
- (宮地 利郎)
- (山根 禮)
- (松井 俊次)
- (御室 佐太郎)
- (高岸 羽雄)
- (豊島 泰國)
- (兒島 幸一)
- (牧野 利家)
- (村井 茂吉)
- (橋爪 庸藏)
- (安田 末松)
- (住吉 四郎)
- (酒井 廣次)
- (北 彰)
- (澤田 富吉)
- (松本 富吉)

- 講道館投之形 (近藤 可哉)
- 講道館固之形 (津山 玄道)
- 講道館体操柔之形 (川上 實男)
- 講道館極之形 (森 長四郎)
- 講道館極之形 (鳥居 武雄)

- 五之形 (初段 淺水成吉)
- 五之形 (初段 中村 政吉)

× 一 中 (高森 隆介) ○ ○ 三 五 (徳田 謹直)

○ 商 (塩 唯一) 二 中 (田多野 信孝)

○ 一 中 (若林 吉次) ○ 醫 (神谷他見 雄)

○ 直江 忠也 ○ 森 (森 長四郎)

○ 醫 (望月 鍾一) ○ 醫 (森本捨三郎)

× 師 (東出安次郎 長四郎) 以上二十九組の勝負互に龍虎の如く戦ひ雌雄相

決す次に有段者勝負 ○ 初段 (中村 政吉)

○ 初段 (浅水成吉郎) 合計六十有六組の勝負皆勇壯を極め満堂參觀者

をして手に汗を握らしめざるなし賞品授與會長 挨拶終りしは六時電燈を点するに及ぶ盛なる哉

四高柔道大會 (G、T、生)



投 書 心 得

一 投書は本會原稿用紙に限る

一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず

一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道
あるべし

一 如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論じ或は徳義に背くものは
一切掲載せず

明治四十五年四月六日印刷
明治四十五年四月九日發行

編輯兼發行者

印刷者

印刷所

發行所

吉 村 政 行

生 沼 倍 男

明治印刷株式會社

第四高等學校北辰會

石川縣金澤市早道町五十六番地

同縣同市穴水町二番丁廿九番地

同縣同市高岡町九十番地

